お三津さん……一頁
山彦……三七
お久……一二
烏物語……一三九
黒髪……一七五
十字架……一九一
千鳥……二一七

明治
45. 6. 29
内交

特12
789

おみつさん

緒の切れた片方の下駄を、帶へ通して腰に下げて、女竹を二本、じい〳〵と後へ引き摺つて、片跣足で、跛を引いて、のらり〳〵歸つて來る。表の提灯屋は、もう店をしまつて門口を掃いて、剝げちよろの戸が下りてゐる。路次へ這入りかけると、提灯屋の障子戸がからつと開いて、

「丁さん〳〵。」と、誰だか、白粉を附けた、若いをばさんが、塵取を提げて出て來た。

「丁さんでがんしやうがの。まあ〳〵すつくり見違へた。こつちへお出てい

おみつさん

おみつさん

丁さん。わたしぢやのに。——もうわたしをお忘れたか。——ほゝゝ別つたの？」

と嬉しさうにして、塵取を置いて側へ來る。おみつさんだ。知らない間にをばさんになつてゐるのだから別らなかつた。綺麗な着物を着て、黒い帶を結んで、綺麗なをばさんになつてゐる。

「まあ大きくおなりたいの。お祖母さまがいつの間にこんなにしなんしたろ。いくつにおなりたい？　え丁さん。」

背中へ手をかけて、覗くやうにして聞くけれど、何だか恥かしくて、電信柱を爪で擦りながら默つてゐたら、おみつさんは後から兩方の手頸を握つて、

「丁さん、なぜそんなに恥かしがりなんす。」と負さりかゝるやうにして、重たく二足三足たじ〳〵と歩かせたが、

おみつさん

「あら、あんたは跣足でゐてか。——下駄は片つ方だけかいの。——ほゝゝこんな事をして丁さん、着物が汚れるに。除なさいよ。もつとかう向いて見なんせ。——好え帶ぢやのにくちや〳〵に結んでおいてるいの。」

下駄をはづして、屈んで帶を結び直して、着物の土を拂つてくれる。

「丁さん、おみつさんがよくおんぶして上げたのを記憶てお出でるか。え？」

おみつさんは齒を黒く染めてゐる。昔のおみつさんとはすつかり違つてゐる。

「忘れたの？」

「いゝえ。」とかぶりを振つて、頭を縮子の帶へ擦りつける。

「夕方にはいつてもおみつさんとお湯へはいりましたぞのい。——あら〳〵また砂塵烟。こつちへお出で、こつちへ。」

と、二人で軒下へ駈け込むと、じやり〳〵と裾うて來て、向ひの生藥屋の看

おみつさん

板がかた〳〵とかち合た。目を開けたら町の東は黄色い烟でかくれて向ふが見えぬ。おみつさんは袖をはたき合つて、

「あゝあ汚ない事。」と顔をしかめて箒を取つて、片隅に掃き寄せてあつた提灯骨の削り屑を塵取へ取る。

「丁さんはあの時はまだお饅頭ぢやつたいの。そしておみつさんとこが此向ひて、隣がお肴屋で——記憶へてお出てるかい。」

「少し知つてる。」

「お肴屋はなくなりましたぞの。向ひはいつ普請をしましたい？」

「疾つくに。去年。」

「さう？、まあすつくり變つたいの。丁さんとこは今裏座敷にお出てるの？」

ほんに。二階の下へ路次が附いたいの。」と、おみつさんは往來の眞中へ出て、髮へ櫛を入れながら、こちらの家並を見てゐる。荷車が來る。

「丁さん、竹を引つ込めて置きなさい。」

「一人で川の處へ行つて取つたの。屋根までである。これお見。屋根とは高いかの。」と立てかけて置く。おみつさんは、默つてつく〳〵昔を考へるやうな目元をしてゐる。藥屋で店をしまふ。

「丁さんお祖母さまは毎日どうしてお出てる。」

「家にゐるの。」

「まだ繼母さまが來られんのかいの。」と言ひつゝ、物を考へるやうな顔をしてゐる。自分は戸に縋つて、横町のお稲荷さんの松の木の上にたつた一つ出てゐる、大きい星を見つめてゐたが、何だがさびしいやうな氣になつて來た。おみつさんが自分の家の子ならいゝのにと思ふ。と、

おみつさん

おみっさん

「おみつや。――おみつ。」と後からおばあが呼ぶ。

「お前そんな薄着で外へ出とつちやいけんに。早うはいんないや。」

と戸の内から呼びかける。後を向いて見たら、戸の節穴に灯がさしてゐる。

もうランプを點してゐるのである。

二

薄暗がりの中に佛さまの線香が一粒、短かく附いてゐる。お祖母さんは炬燵の向ひに寢てゐられるやうである。

「おばあさん。」と言つたが返事をなさらぬ。ランプを探して灯を附ける。お祖母さんは、最う、本當に床を伸べて寢てゐられる。頭の處にはわしの夜具も出してあつて、寢間着が炬燵の上に置いてある。枕もとへ踞んで、蒲團の

綴絲をいぢくりながら、

「おばあさん〳〵。」と言つたが、矢つ張り寢てゐられる。おばあさんの額には、丁度兩の眉毛の眞ん中に黑いほぐろが一つある。わしが時々其上を指で押へると、目を堅く閉つて、もういゝ〳〵と言はれる。そのほぐろをじいと突いて、指をぐる〳〵動かしたら、

「あ。」と言つて目を開けて、

「丁さんか。戻つたかい。」と言はれる。

「わしや寢入つたさうな。もう夜ぢやいの。今まで何してお出てた。こんなにいつまでも歸つて來ぬとお祖母さんは何んなに氣遣ふか知れんがの。板の間にお膳が下ろしてあるから、徐とこつちへ持つてお出て。――お止し〳〵。ランプを動かしてはいけん。丁さんが扱ふとつい引つくり返すけ。

おみっさん

おみっさん

お膳をこつちへ提げて來れやいゝのぞい。下におかずが入れてある。そいから、この中をお見。」

言はれるから、炬燵へ手を入れて見る。

「下つとるじやろ。」

「何が。」

「上に〳〵。眞ん中に。」

蒲團を剝いて見たら、小さい蓋物がハンケチで包んで釣してある。御飯が溫めてあるのである。

「跡をとん〳〵と叩いて置かんとすう〳〵する。——さう〳〵。もういゝのい。」

おばあさんは、今夜は何だか力なげに、途切れ途切れに物を言はれる。小さい赤いお膳を下ろして、赤い箸で胡麻鹽の振つてある御飯に、筍の煮たのを副へて食べる。おばあさんは目を閉つて額に苦しげな皺を寄せてゐられる。

「おばあさんは具合が惡いの？」

「お茶かい？そつと下さんと重たい土瓶ぢやから、——手へかけてはいけんぞの。火傷をするからの。おばあさんは足が立たんから、お給仕がしてやられぬ。」

「なぜ足が立たんのじやろ。」

よく見ると顏の色も少し惡い。

「さつき物置から重たいものを提げて來しなに、どうやらしたらつい蹌つい轉んだいの。只輕うに轉んだゞけぢやのに、足やらそこいら中が痛いのい。少し風も引いとるんぢやろ。氣分が惡いぞの。」

おみっさん

おみつさん

「いけんのう。どうおしる。」

「なんの、もういゝのぞい。かうして寢て起きたら、あしたになれや早世話はない。然し最うわしもつまらぬものになつたわいの。」

「お父さんが早うお歸るとえゝのにのう。」

「とうさんかい？とうさんはまだ中々戻りやせぬ。けふは十九日。いよ〳〵あしたからお彼岸ぢやいの。丁さんや、すんだら板の間へ出してお置き。そうして、あとでこの蒲團をそつちへ引摺つて行つて丁さんの寢間を敷いておくれ。どうでも早うお母さんを貰はねば、わしやもう追々世話が出來まいて。女を置いて見れば不束なわしでは切り廻しが出來ぬし、――嫁が來ねばいけんぞの。おふさがもう少し生きて居つてくれたら言ふ事はないのに。」と獨り言のやうに言はれる。お膳を片づけて、ランプの前へ膝を組

んで、側にあつたマッチを取つていぢくつてゐると、

「丁さんや、おばあさんはいつ亡くならうも知れんぞの。跡でどんなお母さんが來るやらの。――も少し目鼻が附くまで見てやりたいが、もうつまらぬ。」と跡は口の中で言はれる。じつと向ふの仄暗い煤けた壁を見てゐると、涙がひとりてほろ〳〵と零れる。おばあさんは目が見えぬ故、

「おまへランプをいぢくるのではないかい。」と言はれる。

「いゝえ。」と言つて、唇を噛しめて内證でしく〳〵と泣く。

さうしてる内に、玄關に誰か來たやうな氣がする。じつと聞いてゐても何とも言はぬ。嘘だつたのかと思つたら、本當に、

「ごめんなさい。」といふ。立つて行つて襖を開けると、

「わたしよ。」と言つて、おみつさんが障子を開けて上つて來る。

おみつさん

おみつさん

「お父さまは？」

「ゐない。」

「おばあさまは？」と言ひ〳〵居間へ這入つて、

「あら、もうお休み？御隱居さん。いえ〳〵さうしてお出でなさんせ。お久しうございます。おみつでございます。」となつかしさうに言ふ。自分は、泣いた顏を見られるときまりが惡いから、入れちがひに玄關へ出たきり、いつまでも暗い中に立つてゐる。おみつさんの言葉は急に低くなつて、

「まあま飛んだ事でございましたいの。外にどつこもお怪我はございませなんだか。」

と聞いてゐる。自分は知らないで手にマッチを持つてゐる。何の氣もなくしゆつと擦り附けて、半分燃やしてふつと消す。先の赤いのが落ちかゝる。急

いて障子を開けて玄關へ投げたら、赤いのがわしの下駄へ當つてすと消える。下駄の緒を切つてゐる事を思ひ出す。わしが直して見やうと思つて、襖の右側を開けると、上がぱつと明かつて、居間の重ね簞笥の脊中が出る。下の片隅に板切が當てゝあるのを取ると、鼠の齧つた穴から小引出へ手がはいる。搔き廻して、心覺えのある、丁度いゝ麻繩を出して、玄關の下駄箱の上の豆ランプを點して、切れた鼻緒をすげかける。心配して瘤に結んだかと思ふと、上から引つ張つて見ればすぐ拔けてしまふし、大分ひねくり廻したけれど、とうと手に合はぬから、打棄つて、おみつさんのゐる處へ行つて、炬燵の横に座つて話してゐる後姿へお負さりかゝる。

「ほゝゝどうするの。重たいに、丁さん。」と後ろへ手を廻して摑まへる。わしは素直に抱かれて、横に膝へ腰をかける。

おみつさん

おみつさん

「ぢやから御隠居さん、まあ、そんな譯なのでござんすけど。」とおみつさんは、何か話してゐた續きをかう言つて、睫に涙を溜てゐるのだつた。

三

起きて見たら、おばあさんは板の間であられを煎つてゐられる。足はだいぶ直つた。おみつさんが、まだ寢てる内に來て、御飯を焚いてお漬も拵へて置いてくれたから、おばあさんは起きずに先つ刻まで床にゐた。昨日また下駄の緒を切つたのか。なぜそんなによく切るのぢやろ。おみつさんがそれも直して行つた。と言はれる。

「おみつさんは？」

「もう家へ往んだいの。」

おみつさんは、こんなにして毎日家へ來て世話をしてくれるんだつたらいゝのにと思ふ。御飯を食べると、直ぐとん〳〵と走つて出て、提灯屋の店先へ行く。赤い劍を十文字に書いた、大きな、お祭の提灯が、軒に繋がつて下つてゐる。お爺がいつもの淺黄木綿の筒袖を着て、汚れた絣の袋を、組んだ膝へ被せて、澁色のつる〳〵頭へ、大きな目玉の眼鏡を鼻の先へかけて、番傘へ字を書いてゐる。お婆は奥の方で、手拭を被つて、提灯の劍を赤く塗つてゐる。日向へ片足の先を出して、默つて、古盤の端に腰をかけて見てゐたら、爺さんは字を書き〳〵、

「誰かしら小坊主が來たぞ。」といふ。

「ふゝゝゝ」と笑つたら、

「えゝつと、こんなはどこやらの坊主ぢやつたいの。」と、矢つ張りこちらを

おみつさん

おみつさん

見ないて言ふ。

「やあい、わしや坊主ぢやない。お爺の方が坊主ぢやい。」

「あら。お爺は坊主か知ちん。」

「そいても頭の髪が一つもないわの。」

「なんのい。髪は一つぱい生へとるい。」

「うゝそ。一つもない。どうこにもない。」

「いんにや。ある。」

「やあい。」

「そいては此小坊主は明き盲目ぢや。黒いのがちよん髷に結うたろが。」

「やあい。嘘ぢやい。」

と言ふと、手の平を頭へやつて、

「あゝれ。ないぜ。ない〳〵。あゝ〳〵大變ぢや〳〵。一つもない〳〵。」と、わざとびつくりして、

「しまつた〳〵。先つ刻までちあんとあつたのに、何なつたろ。はあての。」

と言つて、傘をくるりと廻して、

「はゝあ、解つた〳〵。丁さんが後から來て徐つと食べたんぢやわい。」

「やあい。」

「食べた〳〵。ちよいと舌を出してお見せ。」と、眼鏡の上から白い目をして

こつちを覗いて、

「ほう。長い〳〵舌ぢやの。あゝ丁さんは歯抜けぢやのう。可笑しいのう。

歯抜けぢや〳〵。」と言ひ〳〵字を書く。お爺が字を書くのは一遍に書かな

いて、同じ處を何度も繪取つたり、後から眞ん中を塗つたりして、とうと

おみつさん

おみつさん

仕舞に大きな字にするのだ。婆さんが、

「丁さん。おばあさんは足は直りなんしたの？」と聞く。

「まだ大分直らん。少し直つた。」

「悪かつたいのう。」

自分はおみつさんはどこへお行きたと聞かうとしたが、何だか氣が引けるやうだつたから、默つて疊の解れ口を引つ張つてゐる。

「をばさん。」

「なあに。」

と聞く。

「あのう……おみつさんは？」と言ふと、お爺が、

「おみつは此上に居るいの。」と言ふ。

「どこに。」

「ん？天井の中に踞んどるい。」

「うふゝゝゝさうぢやないえのう丁さん。おみつさんはの、裏の小母さんと、こへ行つとるんぞの。」とお婆が本當を敎へる。裏の二階の縫物屋である。わしの家が提灯屋を提灯屋へ貸して、提灯屋が提灯屋の裏二階を縫物を敎へるをばさんに貸してゐるのである。

「丁さんも行つてお見。嬢さんたちが大勢ゐてぢやけ。」といふ。だつて恥かしいから、

「厭あ。」と言つてこそ〳〵家へ歸つて行く。

歸つて路次の横の小猿戸を押して、座敷の庭へ這入ると、頭の上が提灯屋の小二階である。竹塀の根の、赤い芽の出た牡丹の木が、戸が障つたと見え

おみつさん

おみつさん

で、這入る後に微かに搖れる。斜になつて尻を紮げた松の木の下に、苔の生へた雪見燈籠があつて、そこから飛び石が筋違ひに、大股で跨げて五つ六つ、順々に大きくなつて行つて、緣に腰をかけると、廣がつた松の葉の上に、二階の障子が白く嵌つてゐる。切れ〳〵に低い話し聲が聞こえる。おみつさんだか誰だか解らぬ。手水鉢の下の苔の上に、椿の花がぽた〳〵と赤く落ちて、ゐるのが目につく。小さい木なのだけれど、花はお椀の蓋程ある。はじめて落ちた花である。一つ〳〵拾つては、燈籠の臺の緣へ順々に並べる。こんなにして、落ちるのをほしから並べると、仕舞には燈籠の下がぐるりと赤くなる。まだ五つしかないから、少し間を開けて片の方へだけ並べてゐると、

「丁さん〳〵。」と上から呼ぶ。四郎さんとこの小さい姉さんが、赤と紫とになつた片袖を垂らして、二階の手摺に縋つてゐる。

「それをあしに一つおくんなさいの。」といふ。

「へ。」と言つて、一つ取つて突き出したら、上から白い手を伸べて、

「あゝれ、屆くものかいの。」と言ふ。裏から見ると花の眞ん中に穴が開いてゐる。兩手で摘んで穴から姉さんを覗いて見て、

「見えん〳〵。」と言つてゐると、

「早うおくんなさいの。」とせか〳〵いふ。

「何あに。あれ、あしも欲しいえの。」と、また誰か知ら出た。紺屋のお國さんだと思つたら。矢つ張りお國さんだ。花びらを一枚むしる。

「丁さん、壞しては厭いの。」

「いゝ事があつた。功さん待つてゐていの。」と四郎さんとこの姉さんが內らへ這入つて、それからお國さんも這入つて、大ぶして、お國さんが針箱の蓋

おみつさん

を、黄いろくなつた紙縒の繩で十文字に紮げて手繰り下ろす。壁の半分まで
も屆かぬから、四郎さんとこのが、緋羅紗の下帶を解いて、まだ足りぬから、
更紗の風呂敷を持つて來て角をつないだ。箱は山吹の花の上へ下りて來る。
更紗は半ばお國さんの手元に餘つてゐる。
爪立ちをして花を一つ入れる。
「も一つ入れぬと傾くから駄目いの。」
「序にも一つ眞ん中へお入れいの。丁さんのはまだあるのでがんしよ？ おま
ち〳〵、悠つくり〳〵。」
「ほゝゝゝ」
「どつこい〳〵。」
「も少しえの。ほゝゝあぶない〳〵。」

「ほゝゝゝ。」と、赤い袖口と縞の袖口と、たがひちがひに、びく〳〵してた
ぐり上げて、やい〳〵騷いて這入つてしまふ。
「丁さん。」
と、また呼びかける。
「あゝ？」と言つて、上を見たら、おみつさんだ。
「あたしにも、一つおくんなさいの。」
と嬉りして手の平を出す。默つて一つ突き出したら、
「ほゝゝうそ〳〵。二階へお出でんか、丁さん。表から廻つてお出で。あん
たお着物が黄色うなつとるぞいの。こゝん處。此處。胸の處をお見なさん
し。」
指の先にも花の粉が黄色く附いてゐる。

四

大切なお彼岸だから、お寺へ詣つてくれねばいけぬ。詣つて母さまを拜んで來い、とお祖母さんが言はれる。

お午を食べると、袂の附いた絹の着物を着て、いゝ帶を甲斐の口に結んで貰つて、きんきらの巾着を横へ下げて、十錢貰つて紙へ包んで帶へ挿せる。玄關へ下りて、いゝ方の下駄を出してゐると、おばあさんが襖をつらまへて出て來て、お包みとお米を入れた袋を包んだのを渡して、

「ひよかい、丁さん。賢龍さんにてもいゝから、おばあさんが詣るのてござんすが、少し具合が惡うござんすからと言うて、それから永田のをぢさんに言ふて、これへ上書きをして貰ふのぞの。をぢさんが二寸見えなんだら、賢龍さんに頼んてもいてくれてぢや。いゝかい。まづ〳〵しとるんぢやないぞへ。」と、同じ事をまた言ふて、

「そして、お經が始まつたら、ちやんと靜にして座つてお出でよ。足が痛うなつたら外へ出て遊んで來てもえゝが、よその家の子のやうに、本堂の縁をとん〳〵飛び廻つたりなんかしちやいけんぞの。庭へ下りて蘇鐵の處へても行つて、離れてお遊びや。それから、紙屋のをばさんが、おばあさんの事をお聞きたら、少しお頭が痛いだけぢやから、寢てはお出でんとお言いや。氣遣うて尋ねて來てぢやといけんから。——未ぢや〳〵丁さん。皆言ふまでよく聞かにや。——しまひに菓子盆で豆の御飯か何かゝ出るからの。よく零さぬやうにして食べるのぞの。あれは丁さんは片手ぢや提げられぬから、下へ置いて、屈んで食べるのぞの。」と、もじ〳〵して敷居の上に立

つてるのに、ずん〳〵いくらても言はれる。

行く途中で、本町のびら屋がびらを書いてゐるから、永い間店先へ立つて見てゐる内に、誰かしら後からわしの耳を引つ張つて、徐つと隣りの店の暖簾の後へはいる。誰だらうと思つて直ぐ附いて這入つて行くと、ぐるりと表へ廻る。下から黄色い天鵞絨の鼻緒が見える。

「やあい、おみつさんぢやい。」

「ほゝゝ、ばあ。——まだこいいらにぶらついとるのいの。」

おみつさんはいゝ着物を着てゐる。直ぐ手を繋いでくれて、

「おばあさんは、もう疾つくに出たとお言ひたのに、今まで何をしてお出てた。」と言ひ〳〵一緒に行く。

「もう途中でぐず〳〵せずに、せつせとお出や。いゝ着物を汚しなさんなや。

ちよいとこつちを向いて見なんし。大層いゝ子におなりた事。湯を使うて貰ふたのいの。鼻を拭く紙を持つておいてかい。」と、立止つて、袂から塵紙を出して、二三枚はなして、小さく畳んで、わしの懐へ押し込んでくれる。郵便局の角の處へ來ると、おみつさんは手を放して、

「こゝから獨りで眞つ直ぐおいて。おみつさんはこつちへ行くの。」

「どこへ？」

「ちよいと此先まで行つて、序に韮を貰ひに行くの。それて蒸すとおばあさんの痛いところがすぐに直るから。」

「韮た何？。」

「葱のやうなもの。早うお出てや。」とおみつさんは横町へ這入つて、一寸こちらを振向いて見て、局の板塀の下をずん〳〵足早に行く。紫がゝつたや

おみつさん

うな羽織の両脇に、つぼめ合はせた袖の八つ口が三すじ赤い。やつぱりぐず〳〵して、立つて見てゐると、蓆を積んで通る荷車から、だし抜けに叱られたので、急いで寺の方へ向けて行く。

五

しめ〳〵と降る夜の雨の門口で、由公の大きな背中から下りる。

「お待ちなんせ、序でに奥まで附いて行かにや濡れますに。すさま〳〵。」

と言ふのを、

「もうえい〳〵。」と言ひ〳〵、深い路次を駈けて玄關へ飛び込むと、居間に三味線を彈いてゐる。

「だれに見しよとて紅がねうきまぞ……」

と、低く謠ふのはおみつさんである。襖を開けると、

「あゝ丁さんお歸りたかい。」と三味線を置いて、

「永うお遊びたいの。何をしてお遊びたいの。」といふ。おばあさんは炬燵の側で、火鉢にかけた土鍋でつぎ切れを絞り〳〵して、足の甲を蒸してゐられる。

「由さんが伴れて來てくれたのかい。濡れはせなんだかい。」と言はれる。

「いゝえ、一つも濡れてはお出でません。肩の處に只ぱら〳〵と雫がかゝつてるだけでございます。さあ直ぐにお着換へなさいの。おいて。帶を解いて上げるから。――何が懷へ這入つてゐやんすの？」

「そうれ。」と言つて引き出す。

「何に？あゝ、千代紙を貰うて來なんしたの。」

おみつさん

おみつさん

「これお見。猫がたんと〳〵お湯へ入つてる。猫のお湯屋ぢやいの。ほうれ、こいつは脊中を摩つてるがの。こいつはこんな事をしてるい。」

「さ早くお着なさい。風を引きますけ。それは後で見やんしやうえの。」

「丁さんはお寺で、言ふた通りにおとなしくしてお出でたかい。豆のおまんまが出たろ？」とおばあさんが聞かれる。

「いゝえ。芋と蒟蒻のおまんまぢやつた。蒟蒻は甘うないから、みんな撰り出して、紙屋のをばさんのおまんまへ入れてやつたい。」

「ほゝゝゝまあ。」と、おみつさんが笑ふ。

「これからはそんなお行儀の惡い事をするもんぢやないぞえ。」

「それから、歸りに雨が降つて、紙屋のをばさんが家へ來いとお言ひたから、そして由をおばあさんの處へ言ふてやらすから、づつと夜までお遊びとお

言ひたんぞの。……」

「また風呂敷をどこかへ忘れて來はせぬかい。」

「風呂敷はこゝにござんす、お隱居さん。——あの先刻、男仕が來た時に持つて來ましたいの。」

「由公が歸りに、丁さんを泥溝の中へ落さうか〳〵と言うたから、落して見〳〵と言つてやつたあ。」と言ひつゝ、炬燵の蒲團の裾を枕にして轉んだら、おばあさんが、見え惡いやうな目をして覗いて、

「丁さんや、今夜からおみつさんは家の子になつたんぞ。いゝぢやろ。」と頭へ手をかけられる。

「うゝそ。」

「うそじやないわの。」

おみつさん

おみつさん

「嘘ぢやいのう丁さん。」と、おみつさんはわしの着物を掛竿へかけて置いて、

「丁さんはおみつさんがきらいぢやから、そいて嘘ぞいのう？」と微笑みながら、ランプの處へ座つてわしを見る。

「うゝん。そんなら本當ぢやい。」

「ぢやあ、おみつさんは嫌いぢやないの。」

「あゝ。」

「いや〳〵。嫌いぢやろい。」と、おばあさんが嬲られる。

「あゝれ、足をそんなにするんじやない。じつとしてお出て。おみつさん、どういふ處までじやつたいの。」

「どこやらでござんした。」と三味線を取つて構えて、とんと言はずにすまそぞと、あそこでござんしたかいの。——いや、あそこは未ぢやつたぞの。

何にしても、御隱居さん、もう久しう持たんのでござんすからまるで忘れていましたいの。」と、つん〳〵と調子を見て、樽の手に赤い袖口をちよと引き出す。

「おみつさん。そんなら毎日家へ來てゐてくれるの。」

「えゝ〳〵。わしや最う丁さん處へ來たんぢやから、夜もづうと泊るんじやいの。」

「今晩も？」

「えゝ。」

「あしたのばんも？」

「えゝ。これからいつ迄でも。丁さんやおばあさんが最う往んでくれとお言ひるまで。」

おみつさん

おみっさん

「そんなら最う他家のをばさんにはおなりんの？」

「えゝ。もう誰がをばさん何かに行くもんぞい。のう御隠居さん。――えゝつと、それぢや、戀の手習ひつい見習ひてから最一度やりましょう。はあつ。」と、にこやかに挂聲をして謠ひはじめる。

雨はいつしか本降になつて來た。

山　彦

一

城下見に行こ十三里、炭積んでゆこ十三里、と小唄に謠ふといふ十三里を城下の泊りからとこ〳〵と、三里は雨に濕れて來た。

「これぢやいの。こつちへ行くと門がゞんすけ。」と言つて、伴の女は、大きな立木の覗いた、古ぼけた練塀の角へ來て止る。この榎が三百年、淡名屋が出來てから三百年と言ひながら、馬の合羽を撥つて風呂敷包みを出してくれる。榎の雫がぱたり〳〵と洋傘に落ちる。向ふ角の小店の、赤い天狗の面を畫いた障子の灯が、泥濘へ茫んやりと寫つてゐる。此簑はこちらから返させ

るからと言へば、

「何のわしにくれなんせ。序がどんすいの。」と言つて馬へ附ける。

横へ這入ると片方は島である。眞っ黑い夜の小雨の奥に、高い木立が夜よりも黑く淀んでゐる。眞っ赤な火が、間にちらと見えて直ぐ隱れる。門口へ來る。あはな屋と書いた四角な金燈籠が、どんよりと柱に下つてゐる。小門を押して見たが鎖されてゐる。早く姉に會ひたくて、とん〳〵と叩いてゐる間も飛ぶやうである。やう〳〵、

「あい〳〵。」といふ若い女の返事が聞えると、石の上を足音が來て、ばさと大戸へ傘を縋らせる。小門が重たげに半分開くと、赤い襷をかけた小女が、下へ置いた手燭を取り上げて、

「どなたでござんす。」といふ。小鼻の脇にほくろがある。

奥の障子にあかりがさしてゐる。手燭について松の中を這入つて行く。途中の小屋に、水鐵砲や細梯子の懸つてゐるのが見える。小屋の横の百日紅が編竹を被せた石の井戸を、落花で赤く閉ぢてゐる。玄關を横に見て臺所口へ這入る。

何をしてるのか、姉は一寸出て來ない。二十ばかりの正直さうな下男と、小綺麗にした年增の女中とが、上つたり降りたりして世話をしてくれる。黑ずんだ、だゞびろい臺所に、暗いらんぷが眞中にたつた一つ附いてゐるばかりだから、何だか岩屋の中へ這入つたやうな心がする。赤い顏をした逞しい下女がゐる。盥を土間の眞ん中へ持ち出して、大釜から腑が拔けたやうな湯を移す。裾を紮げて其中へ立つと、下女は鮫の皮のやうな手の平でごし〳〵と踵を擦る。下男が側へ來て提灯を見せる。何か煤でた跡の湯と見えて、菜

つ葉のちぎれが交つてゐる。さつきの小女が、板の間の圍爐裏の鍋の下に粗朶を焚く。向ふの、黒光りの戸棚へ、其火が映つて搖れてゐる。裏口の方に早い蟋蟀が二匹、まだこそ〳〵と啼いてゐる。姉は何うしたものか未だ出て來ない。

女中に足を拭いて貰つて上へ上りかけると、眞つ白い顎髯をしたお爺さんが出て來た。

「さあ〳〵お上り。どんなにか疲れましたろぞい。前から知れてゐれば迎へを出すのに。えらかつたでしやうぞいの。こんな山の〳〵奥で…まあま、挨拶はあとからにしましやういい。」と、にこ〳〵して、

「こつちへおいで。姉さんがびつくりするぢやろ。」と言ひつゝ、薄暗い間を二つ三つ拔けて、そこの障子を開けて縁側へ出ると、

「禮さんかい。まあまあんたは……」と、取り縋るやうに呼びかけて、姉が小黒く馳せて來る。

二

頭の處に手拭と楊子と齒磨の箱とが置いてある。姉の寢床はいつの間にかすつくり片附けてある。何時だか別らぬけれど、大ぶ朝寢をしたらしい。

起きて縁側へ出る。曇つた空が低く小庭に被つて、今日もまた雨らしい。手洗ひの水が、八手の中の竹の筒から、ちよろ〳〵と水引花の中へ落ちる。傍の小窓の青桐の間から、裏の花畠が見えてゐる。手水を使ふと、燒杉の下駄を突つかけて行つて見る。浮くやうにして歩かぬと、足の裏の豆が痛くてならぬ。

杉垣を出ると、裏は廣い蔬菜畠である。眞ん中の一仕切が花壇になつてゐる。大きな倉が七戸前、向ひ側に白く續いてゐる。畠の右を限る果物の林の後ろから、昨夜の榎が、二た股に、高く空に突き出てゐる。花壇の中の亭へ這入る。白い蝶々が三つ四つ、花へは來ずに、畠の大根に飛んでゐる。

靜かに腰をかけてゐる内に、向ふの青柿の間から、色の白い女がふいと現れて、畠の中を眞つ直にこちらへ向いて來る。——姉である。白木の三寶を提げてゐる。いつの間にか艶やかに髪を結うて、薄化粧をして、帶をきちんと締めて、小ざつぱりした若女房になつてゐる。微笑む目元も活き〳〵して昨夜とは全て見違へる程である。

側へ來て、

「疲れが出たろ。」と言つて肩にさはる。

「外はないが足が痛い。じつとしてゐても、切石の上を走るやうだ。その三寶は何だ。」と言へば、

「まだ母様から聞かなんだが。三百年このかたの掟で、日に一度、あの榎の下のお社へ、片手に一と掬ひのお米を供へるのが、家の女房の大事な勤めの一つになつてゐる。雨のふる日は褄をからげて傘さして來る。」

「姉さんが寢て居た間は誰がする。」

「ほかのものではいけないのだ。こゝの母様は二十七とかで亡くなられて、それきり二度目のも見えなんだ故、わしが來るまで大方三十年の間、神さまは只年に一度、二月の十八日とやらのお祭の外には何にもお貰ひなされなんだ。神様も不仕合せでゐらつした。三十年してわしが來ても、」といひかけて姉は一寸銀の簪に手を障へて、

「あの御神體は鎧ださうだ。」といふ。

じつと見てゐると、姉は矢つ張りやつれてゐて、どことなく力が拔けてゐるやうである。

「もう起きてもいゝのか。」と聞くと、

「あんたがかうしてはる〳〵來てくれたのに、寢てゐては濟むまい。」といふ。

「それではわしに對して我慢するのか。」

「いや。あんたが來てくれたので直つてしまつたのだ。」と言ふ。ほんとかしら。緣附いて來て間もないのに、二た月も續いて、寢てゐても、それを家の方へは知らさなかつたのである。わしにも默つてゐた。あんたは隨分だといひ〳〵、花壇のはしの白い花を浮つかり拐る。

「その恨みごとは昨夜もう聞いたぢやないか。そんなにたいした病氣ぢやなし、只何となく氣分が惡いだけだつたのだ。かゝ樣が氣遣はれる故、あんたこゝへ寄つて行つたといふ事を知らせても、わしが寢附いてゐたとはいふておくれるな。よ。」と念を押して、わしや先きへ行く。もう直ぐお午だ、と歸りかける後姿へ、指先の花びらをふつと吹きかけると、五つ片六片ひら〳〵と、一つが辛うじて、鶯茶とかいふ帶の色へ、白くかゝつて直ぐ落ちる。

鎧を祀つたといふ社が行つて見たくなる。姉が出て來た柿の木の間から、深い果物畠を拔けて、例の榎の立つてゐる、扇骨木垣の中へ這入つて行く。向ふの隅の榎の下に、小さな茅葺の社がある。榎の、眞つ黑い、じめ〳〵した太い幹の眞ん中を、青い蔓草が二尺ばかりの巾に、二た股の處から高く社の屋根まで這ひ下つてゐる。古ぼけた練塀に亂れ續いた、花は枯れ枯れの萩

の中に、一基の石碑が小暗く立つてゐる。こちら側には、小さい石燈籠が向ふに九つ、ふり返つて見れば總て十四、垣に沿うて列んでゐる。一ばん端の一つはまだ新らしい。あたりは一面に深い苔で、雨上りはつる〳〵して滑りさうである。石に刻んだのは社の縁起であつた。

「此祠祀我遠祖。去今三百三十年前、」と書起してある。古き代の物語は、絵巻物の絵を見るやうである。三百三十年の其昔、永祿丙寅三年閏八月、雲州富田の居城陥落して、尼子氏の一門悉くこゝに亡ぶ。併し、さる處の土豪の家に、宗徒のさる大將の――名は分らぬ、――さる重い大將の血を分けた七つ八つになる子供があつた。勝に誇つた毛利の軍兵が、追付その方へも押し寄せて來ると聞いて、此子に挂る災を恐れた母は、腹心の家の子を頼んで、絹を商ふもの〻夫婦に拵へて、素早く里を落ちて出た。二匹の馬に積んだ荷包みに紛らして、一包みは親が分けてくれた千兩の小判、一つには、昔一夜の殿御から、もし生れた子供が男なら、十五になつたら、二人伴らつて名乗つて來いとて、其印に遺された、今は悲しき形見の緋威しの鎧を匿しつゝ、いづこからいづこへ渡つてか、百十何里を落ち延びて、此山中へ出て來た時、女は假染の煩ひから遂に此世を去つた。下男はとうと此里に炭商人となつて、殘された子を手一つに育て上げ、十七になると家を繼がせた。是が淡名屋の初代七郎右衛門である。當時此邊も矢張敵の領内であつたので、胡亂な鎧は、下男が、早く石棺に納めて、中庭に埋めてしまつた。二代に至つて其上に小祠を建て、胡子社と稱して私かに尼子氏を祀る。時に元和乙卯元年二月十八日。二百六十二年の昔である。古き代の事はこれ丈しか別らぬ。記錄も何もない。戰亂の世に居ては、色んな事が禍の種になり易い故、名

族の血を引いてゐるといふ事は深く世に秘めてゐたのてある。只これだけの事を親々が傳へて來た。此榎は、樾には別らぬが、古く此社の出來た頃からあつたのだといふ。——

こんな謂れが書いてある。裏を見ると、二十年前に建てたのてある。十三代七郎右衛門とあるのは今のお爺さんの事と見える。石の肩の窪みに蟲が赤土て巣を食うてゐる。萩の枝をむしつてついいて見たが、中には何んにも居ない。中指て押へたら、げちやりと潰れてしまつた。

小さな鳥居を潜つて堂へ上る。蔀を覗いたら、豆粒程の燈明が青く消えかゝつて、小暗い中に、お鏡が物の目玉の如く仄白く光つてゐる。三寶に供へたのは白米てあるとは慥と別らぬ。榎の後ろへ廻つて見ると、蜘蛛の足のやうになつて浮き出た太根の間に、小笹が生え詰つてゐる。幹は四抱へも五抱へもあらう。此木の下を掘れば、石棺が其まゝ出るのてあらうか。その緋威しの鎧が見られゝばいゝにと思ふ。上から何やらぱたりと足下に落ちる。見廻したが何が落ちたのか別らぬ。苔の中に榎實が黒くなつてちら〳〵埋つてゐる。咽を釣り上げて上を見ると、高い〳〵梢の眞つ先に、烏が一匹棲つてゐる。嘴を頻りに枝へ擦つてゐる。頸が痛くて見てゐられぬ。烏居を出しなにかあと啼く。

三

お爺さんの處から痺れを切らして出て來ると、姉が向ふの唐紙をあけて招いてゐる。鮎が澤山獲れて來たといふ。それから栗が落ちてゐると言つて、奥の廊下へ伴れてゆく。

片側の栗の木の下に、青栗が五つ六つ落ちてゐる。果つてゐる栗にも、小雨が白く塗れてゐる。まだ拾つたつて駄目なのかと聞いたら、一昨日下女に割らせて見たが、中はまだ白かつた。其内、山へ探しにやろ。山にはいゝのがあるかも知れぬといふ。

廊下の突き當りは雨戸が締つてゐる。お天氣になつたらあそこを開けさせて庭を見せやう。いつもあゝして締つてゐる故、掃除をせねば汚なくて這入れまい。わしが來た時には、あそこで祝言をしたのだつた。そして父さま母さまが、一番奥の間へ五日泊られた。さあ、鮎を見にゆこと、姉は帶上を締め直す。

臺所にはもう灯を附けてゐる。縁側へ出て見ると、井戸端に四斗樽へ六本の鮎が獲れてゐる。大川の簗へかゝつたのださうてある。筒袖に繩の帶をした若い男が、口を尖らせて、景氣よく數を讀みながら、大きいのばかりを選り別けて蓆へ出す。二人の男が、それを一つ宛竹の串へ刺して籠へ入れる。向ふの風呂場の後ろから、簑を着て、背中に粗朶を負うた女が五六人、ぞろ〳〵と這入つて來た。こゝを見て、

「今度は大層獲れたいの。あれて何遍目ぢやろ。もう今年はお仕舞ぞの。」と黄ろい聲で評し合つて物置の後ろへ這入つて行く。小さいのは鹽漬にし、大きいのは、あゝして串へ指して、お午に食べたやうな干鮎にするのださうてある。あの小屋へ行つて見て來いと姉がいふ故、下りて傘をさして行つて見る。

小屋の中には昨夜の下男が、大きな二つの火鉢に火を拵へてゐた。串の鮎を、頭を下に、背を内へ向けて、此火の周りへ挿し列べて、上からこの桶を

かぶせて五六時間放棄とくと、鮎は乾いてかち〳〵になる。桶が焦げないやうに、時々上の底へ水を注す。かう言つてしまへば造作もないやうだけれど、其火の加減といふものが中々骨である。鹽漬の方は早く食つてしまふのだが、干したのは來年まで一年中の食料になる。けふは七十貫とれた。大凡要るだけ拵へたら、其後はなんぼ取れてもすつくり村中へ別けてやるのだといふ。

下男は話しながら煙草を吹く。松の木の瘤で作つた煙草入で、さいも木の根で旨く拵へてゐる。お前の細工なのかと聞いたら、まだもう一つ拵へかけてゐるから、今夜わしの寢る處へ來て見ぬか。面白ければあげるといふ。

小屋を出やうとすると、先刻の女たちが、臺所の戸口で、一人〳〵縞や型の袋を披げて、下女に米を貰つてゐる。後に聞くと、これが此日の勞銀ださ

うであつた。縁側へ笠を脱いで、黄楊の小櫛に鬢の解れを掻き上げてゐる、目元の涼しい、十六ばかりの娘がゐる。びしよ〳〵に濡れた襲の胸に、赤い襟が覗いてゐる。どこかで見た事があるやうな氣もして、傘を披げかけてじつと立つて見てゐると、女は櫛を手に持つた儘、うつとりと宙を見詰めてゐたが、「お由や、おい〳〵。」とせぎ〳〵に向ふへ歸つてゆく一人に振り返られて、急いで笠を被り、紐を結び〳〵走つて行く。風呂場の軒下に、砂に埋つてゐた鷄が刎ね起きて、小雨の中に體を振ふ。砂が濛つと背中を包む。

此夜、姉と二人で青桐の雨に搔餅を燒いて食べながら、いろ〳〵昔話をして、もう小早に寢やうと言つてゐる處へ女中が來て、乙吉が何か言つて來たといふ。松の瘤の煙草入の男かと聞いたら、あの男仕てございますと笑ふ。この下男は七つの年から此家へ來たのださうである。炭舟の船頭をしてゐる

のだといふ。早く行つておいて。其内に床を取つて置く。此宵は二人てこゝへ並んで寢やうかと言ひつゝ、姉は針箱の上の水藥を飲む。

提灯をつけて、乙吉と伴らつて、屋敷の隅の男仕長屋へゆく。三つ目の部屋へ伴れられてはいる。破れ疊の八疊である。眞ん中の圍爐裏の側に、白髮の爺さんが、カンテラの灯で草鞋を作つてゐる。この爺さんは聾ださうてある。後ろの古壁に仕事着がづらりと懸けてある。

乙吉は拵へかけの煙草入を見せて、このてこぼこさへ落したら、後は椋の葉で磨きをかけるだけだから譯はないと言つて、赤く燒けた古壁を火の中から拔いて、刻つた瘤の中を燒くのである。濃い煙がじう〳〵と立つ。カンテラの臺も此男の工案と見えて、三叉になつた女松の小枝を逆さに立てたものである。稍あつて格子の障子の外から、

「乙や。」と、五十ばかりらしい聲が呼びかける。

「濱の方のお米が盡くなつたと言ふけ、あした爲樣にさう言うて、誰でもえゝけ一と馬御苦勞してくれんさいの。」

乙吉は、

「あい。」といふ。

「この影法師は誰じやろ。勘一われやいつ毬栗になつた。

「ふゝゝ勘ぢやがんせん。勘は夜番に出とります。」

「さうぢやろてい。勘が浮かゝ坊主になると、例の饅頭禿が出るての。誰ぞの、そいては。」

「ふゝゝゝゝ。」

「えゝ？。」

「こなさんは、あれや奥様のお里の方。」といふと、

「あゝ、これは〳〵。眞つ平御免なさいませ。」と言つて這入つて來て、ぴか〳〵の頭を撫でながら、初對面の挨拶をする。濱の炭倉の方の番頭ださうである。青い盲目縞のぢわ〳〵した木綿羽織に、紙縒を紐に結んでゐる。

此親爺が、こゝの家の事を、わが自慢のやうにあれこれと話して聞かせる——。

家の山は凡何萬町歩ある。こゝから奥へ六里這入つても七里這入つても、よその家の山は一つも歩かぬ。九里行つて國堺の處まで行くと、昔から足一本踏み入れぬ大深林がある。多くは杉と檜で、其大きい事と言つたら、家の榎なぞは容易にその孫にもなれぬ。此頃は、そこから二里ばかりこちらで杉を切り出すので、杣や人夫が五六十人も籠つてゐる。若旦那も行つてゐられ

る。切り倒した木は、枝を拂うて轉がして置いて、雪が積んだ時に谷を滑り落すのだ。それを木挽が板にして、筏に作つて川を下ろす。これから冬の半へかけては方々の炭竈で炭を燒く。一昨日も五十駄積んで來た。炭のいゝ惡いは木に依るが、それも落葉の頃に燒くのが一ばんいゝのである。三里ばかり行くと一寸した竈がある故。其内荷馬に乘つて行つて見ぬか。そこらへ行くと愈々山ばかりて、家なぞは三里の間に一軒もない位だから、猿が一人で威張つてゐる。用心しないと、浮つかり先生達に調弄つて腹でも立てさすと、行く内に連中を澤山集めて來て、山の曲り角なぞに待ち伏せしてゐて、見張りに立つた奴がぎやあといふや否や、一度にばら〳〵石を投げつけたりする。中々手に合ふ奴ではない。夏なんかは、馬方が馬を繋いで、午寢して、さあ行かうといふ時に、側へ置いといた辨當行李がない。笠がない——見廻すと、

それが頭の上の高い〳〵木の先つ頭へぶらさげてあつたりする。現に一昨年の春であつた。わたしたちが此邊の山林を見廻りに行つて、山の木挽小屋に住んでゐた時である。或日みんなはそれ〳〵持場へ出て行くし、わしは留守居に殘つて飯を焚いて——二升であつた——それを樫へ取るなり棚へ仕舞つて置いて、日向の蓆で顎の髯を拔いてゐたら、一つ時して皆がわい〳〵騷いで歸つて來るから、何うしたのかとさよろついてゐる内に、屋根から茶椀が二つ三つ轉がり落ちてがちや〳〵と碎ける。びつくりして上を見たら、お樫が屋根の眞ん中に乘つかつてゐる。箸や漬物が散らばつてゐるといふ體たらくだ。猿奴が飯を食うて遁げたのだ。いつの間にお樫なぞを盜み出したのか一寸も知らなんだ。小面が憎かつたのは、そんな事をして置きながら、すぐ後ろの松の木へ遁げ上つて、すまし込んで蚤の取りつくらをしてゐる。小猿奴

は小猿奴で、親の赤いおけつへぶら下つて、ぶらら〳〵ぶらんこをしてゐるのだ。——

番頭は講談のやうに色んな手眞似なぞをして乘り氣になつて喋るのである。大變面白い話だが、二升飯のお樫は猿には少し重くはないかと言ふと、

「はい。てもほんとでございます。現に誰かゞ下ろしに上つたのでございます。のう、これ乙吉。」

「わしや知りまへん。船頭は山へ行かんけに。」と細工の手の小刀がひかりと光る。

「はゝゝゝこれは仕挫つた。さうだ〳〵、勘が知つとるわい。」と少しへこんだ氣味で煙管をはたく。聲は草鞋を二足作り上げてゐる。

四

掃除が出來ましたと言つて來たから、讀みかけてゐた本を伏せて、姉について立つて行く。廊下の栗はあれからまた澤山落ちた。小女が、手拭を被つて雑巾桶を提げて出て來る。厄介だからこゝらは開けさせなんだと言つて、二十五間だといふ長い縁側が眞つ暗である。火吹竹を覗いたやうに、向ふに小さな潜戸が開いてゐる。そこから出ると、更に三四間の廊下が斜めに奥の一と間に導く。

欄干の下は水である。仄白き花の萍に、絹絲のやうな小雨がかゝる。水の向ふには、杉の大木が何十本と立ち重つて、男郎花女郎花などが、間にちらほら咲いてゐる。こゝは百十何年とやら昔に、國の殿樣が來られた時に建

てたのだ。此上へ上れば庭がすつかり見えると言つて、姉は襖に兩手をかけて、寂びた銀箔の色を左右に開く。中は小暗い四段の段々になつて、黒塗の障子が高く嵌つてゐる。上へあがれば、古い繪草紙の中へ這入つたやうな心持がする。床の間の虎の皮や、脇息や、紋のついた大きな黒塗の煙草盆などを取り出して、殿樣がたつた今まで坐つてゐたばかりのやうに並べて見る。姉が下の間に疲れたやうに膝を崩して坐つてゐるのを見て、姉さんこれをお見。あゝ、まだ此刀かけをこゝへかう置くのだねと、抱へて來る。

「ふゝゝ昔は可笑しかつたのね。」と言つて姉は、傾きながら微笑んで、二つの袂を膝にかき合す。

障子を開けば、欄干に赤く覗いた芙蓉の花に、絲櫻の枝が雨の如くにかゝつてゐる。滿庭すべて楓の古木のみである。後ろに女松の茂つた小山を負う

でゐる。間近く鎖す霧の中から、頂上の岩が危く眉に迫る。山のはづれに外が少し見えてゐる。只眞つ白な霧の中に、二本の高い銀杏の木と、赤瓦の寺の屋根とが、半分ばかり覗いてゐる。姉も上つて來る。高く水に架たす橋の欄干へ、一羽の翡翠が下の河骨の中からつと上る。

自分は此一と間が太變好きになつた。姉が用事をしてゐる間や、向き合つてゐても話が切れてしまふと、すぐのこ〳〵こゝへやつて來る。毎日〳〵小雨が降つて、外へ出る事も出來ないし、仕方がないから、後には、こゝへ火鉢や机や、其外姉の部屋の調度をいろ〳〵運ばせて、晝間はこゝを居處にする。姉も用事をして置いてはこゝへ來て、二人で物の本を讀む。汽車の切符は、ぐづ〳〵する内に役に立たぬ事になつた。家でも此處へ寄ると言つて來たのではないし、學校の事も氣にかゝらぬでもないが、姉と別れるのがいつまでも惜しい。雨が續いてくれるのが却て仕合せである。姉は、雨が上れば自分はこゝを出てゆくのだといふ事を全く考へもしないらしい。只あんたがゐるから嬉しいと、何がいふとすぐさう言ふて、自分はいつまでもこゝにかうしてゐるものだといふ氣でゐるやうに見える。

雨はじめ〳〵と四日つゞく。

四日目の午まへの事である。やはり、例の好きな一と間へ來て、退屈して火鉢の灰をいぢくつてゐると、どこから出て來たのか、小さな鼠の子が一匹、横の障子の根をちよこ〳〵と走つて來る。毛氈の端まで來て、二寸立ち止つて、小さな粒々の黑い目を上げてじつとこちらを見てゐたが、其内にくるりと向き換つたかと思ふと、大急ぎに走つて段々の方へ這入つてしまふ。稍あつて、一寸頭だけ出してまた引つ込む。

立つて行つて見ると、どこへ這入つたか、最う姿が見えない。をかしいと思つて見廻してゐると、段々の横の、小さな押入の戸襖の下の方に、小さい穴が開いてゐる。あそこだと思つて襖を開けて見ると、中はがらん洞で何んにもない。ほこりの中に鼠のふんがぽつ〳〵落ちてゐる。さつきの鼠の遁げ處を突き留めなければ氣が濟まない。下の間へ出て行たのか知らと考へてゐると、月棚の天井でちい〳〵と鳴く。見ると、天井の板の合せ目に二寸ばかりの隙がある。爪立をして手を當てたら、板がずらりと横へいぢると同時に、砂のやうなごみがじやあと落ちたから飛びのいた。上から藁が一本下つてゐる。こんどは段々の二段目へ上つて、斜めになつて手を入れて探つて見たら、紙屑のやうなものがぐちやぐちやとある。奥の方で親らしい奴がこそ〳〵と言はせる。顔をしかめてぐいと手を突つ込んで掻き廻して見たら、何かじら囲い物があるのだつた。

取り出して見ると、たばの封書である。上になつてゐた方は、鼠が齧つてぼろ〳〵になつてゐる。どうしてかういふものがこんな變な處に這入つてゐたのであらうか。あゝして誰かゞ匿して置いたものであらうか。變だと思ひつゝ、煤だらけだから、そつと縁先へ持ち出して、どうせ汚れついでに手の平でぱたきながら、裏を返して見ると、七さまゐる、千ゑより、とかいてある。女の文字なのである。八通ある。余程古いものだと見えて、真ん中を括つた紙縒などは、醤油で煮締めたやうな色をしてゐる。上包の白紙も真つ黄ろになつてゐる。手を洗つて机の處へ持つて上る。探して見れば奥の方にこんなのがまだいくつもあるかも知れぬと思つたが、穢ないから止めにする。

火鉢に絶える火種をついで、じつと此古き戀を見詰めて坐つた時には、丁

度春の日の漫ろ歩きに、菜の花の中に分るゝ路の、何れへ曲ろと躊躇ふやうな心であつた。文の文句が披いて見たい。披いたら、若き昔の二人は羞かしがらう。披かずに置かうかと思案したが、それではやつぱり心殘りである。自分へ來た手紙を封を切らずに捨てゝ置くやうな心持がする。尙迷ひながら、紙縒の下へ指を通さうとしたら、紙縒は線香でも折るやうにぽくと切れる。

下の二通を手に取る。――下のも矢張七さまゝゐる千ゑより、とある。――裏を見ると此分はまだ封が其儘である。變だと思つて次のを取れば、これも封が切つてない。次のも矢つ張さうである。最後の二つはぼろ〳〵だけれど、全き六通は六通ながら皆な同じに、封が其儘である。中には蟲が入つてゐるのがあつて、黃粉のやうなふんが落ちる。それ程古い手紙が一つも封が

切つてないのである。これは只の嬉しい戀ではあるまい。開いて見やう。古い昔の手紙を見るに誰に濟む濟まぬもない事である。じいと一つをちぎりかけると、廊下にとん〳〵と足音がする。惡い事をてもしてゐるやうにどぎまぎして、机の下へ隱して了ふ。女中が來たのである。下の間に手をついて、あなた御飯でございますといふ。

五

姉に手紙の事を話さうかと思つたが、妙に自分の事でもあるやうに耻かしい氣がして默つてゐた。食事がすむと、お爺さんが、梨のいゝのを貰つて來たからと、姉と二人を部屋へ伴れて行く。姉は山の兄の處へ送るものを整へねばならぬと言つて、ぢきに立つて行く。例のやうに長たらしい話に捕へ

られる。今日は笛の講釋てある。お爺さんは篠が出來るのてある。若い時に寺の院主から教はつたのだといふ。さつきの手紙の事が氣になつて、仕舞にはもぢ〳〵して坐つてゐた。やうやくの事て話が切れる。

再び奥の間へ歸る。向ふの水のほとりの草叢に、蟲が一匹、かすれ〳〵に畫の小雨に啼いてゐる。杉の木間に湧く霧が、煙のごとくに水を渡る。——自分は古き代の戀の封を切る。

しめ〳〵と小雨のごとき筆の跡てある。

けふの牛いちへお里からまゐりし人の由を聞き、また〳〵かひなきうらみをことづてたり〳〵

と、走りがきに縫れた假名が、考へ〳〵て五行ばかり續める。中途て先まて開いて見る。一尺程開くとばらりと紙の繼目が切れる。摺つた模樣のもつれ

絲か、紅葉の色も仄かに昔もて、絶え〳〵に文字の間に絡えてゐる。最後にぎさちきの中七日、千ゑより、こひしさ〳〵七樣まゐるとある。恨みを言づてまゐらせ候と、再び前から辿つて行く。讀めぬ處が多くてもどかしい。苛だてば尚別らなくなる。たゞ飛び〳〵に二三行づゝ習りくさしたまゝて、ずん〳〵六つの封を開く。

それでも、氣を落附けてよみ返すと、だん〳〵少しづゝ解つて來る。時々後へ返つては較べ合はせて見たりする内に、文句は少しづゝ頭に浸みる。

叶はぬ戀の恨みである。女は夜晝涙に伏して、袖を噛みちぎつて悶えてゐる。何ゆゑか男は取合はぬ。いくたび文の數を重ねても、たゞ一言の返事もくれぬ。昔は昔。副はれぬ戀は互に忘れてしまひたいとばかり、救出すやうに返事して、其後またいくたびも出す文は、さんどは〳〵と、待ちに待つのが

いつても仇だ。あれだけの數々を、一つに繋げば、何十丈といふものになるであろ。其中に、一寸ぐらゐは不憫な女の願ひが見えてゐさうなものだ。添うてくれなぞとはもう疾うにから言ひはせぬ。わしが厭になつたのか。大方それはさうじやろが、厭になつたらなつたのだと、只それだけ聞かしてもらひたいばつかりに、此三年を生きてゐた。いやになつたと書いてよこす一言が、何故そのやうに惜しいのか。わしが恨めしさもどかしさは、水を掬へば火となつて落せば再び水となる、地獄の底の責苦に、生きて遭ふのかと思はるゝ。縁側に立つて北の山を見つゝ泣けば、涙の目に迫るあの山々が、噛んで〳〵噛み碎きたい程やるせない。果はいつも其まゝそこに伏し倒れて泣くのである。――

女は誰にも話さずに、此苦しみを狹き胸一つに押しこめて悶えてゐる。母親は何んにも知らずにい病はわしが念力でも取つて除けると言つて、三年の長煩ひを力をつくして介抱してゐるのにい女はいつまでも直らぬやうにと祈つてゐる。直つたらまた縁附の話で血を絞られなければならぬ。

されど母さまがわしの介抱に痩せてやつれてゐられるのを見れば天罰が怖しくなる。先夜も次の間で泣いてゐらるゝ故、よろ〳〵起きて行つて見たら、簞笥からわしの衣裳を出して泣いてゐられる。先年大村屋から話があつた時、なぜそなたは此衣裳を着て縁づいてはくれなんだかと責められる。あの時にはお前さまから内證でくる文が、帶の間に絶えた事がなく、いちんち只そは〳〵とくらしてゐた。仇し男にどうして添はれやう。母さまは再び涙を飲んで、三人がくりて十日も寢ずに此衣裳を仕立てた時には、わしや手足も浮いてゐるやうに嬉しかつた。あの時素直に行つてさへくれたなら、たとへその

後とんなに煩うて寝やうとも、それは里へ歸つて寝てゐる病、いまはそなたは年頃すぎて、いつまでも縁づかずに煩らうてゐるのだと泣かれる故、かゝさま堪忍して下されませと泣き入れば、いゝや、わしや叱るのぢやない、不憫なからだ。たとへ今すぐに直つてくれて、すぐによそから貰ひに來てくれるとしても、それ見や、十七の春の此花のやうな振袖は、もう着ては行けぬぢやないか、とうと生涯着られぬぢやないかと言はれた時は、わしや勿體なうて切なうて、生きてゐるのも辛くなつた。——

六つの文はかゝる痛ましき繰り言を聯ねて、返事をつゝと足に取り縋らぬばかりに頼んでゐる。いやになつたのだと一と言聞けば、それて、未練も遺さずに、此まゝ絶え入る事が出來ると言ふのである。六つ目の文には、追書に、小十は大井さまとやらいふ三百石のお侍へ仲間に這入つたと書いてあ

る。——

南はやうゝゝ小暗くなる。

六

七さんといふのは誰の事か、お爺さんに話せば別るだらうが、何だかそんな事も聞き難い。お爺さんの耻てもさらへ出さうとするやうな心がする。考へて見ると實際又、お爺さんの親か叔父か兄弟かであるかも知れない。事によるとお爺さん其人かも別らない。滅多なことは聞かれない。そして一方から言つても、誰だといふ事が分つては興がなくなつてしまふかも知れない。日向へ出しては味が拔ける。矢つぱり月夜の霧の奥に、仄かに仕舞つて置かねば損だ。だれだといふさまりはない。只國々に、殿様といふものが治めて

ゐた、古き代の戀である。七さまは世話物に出て來るやうな若い綺麗な男なのだ。

だからお爺さんには言はぬけれど、姉にだけは窃そり話したい。情深い姉が同情すれば、果敢ない文の女は嬉しがるに違ひない。手紙は懷に包んで持つてゐる。

言はうか〳〵と思ふけれど、女中がゐるから何だか言ひ出せない。二人はランプの向ひ側で、奥山の兄へ送る綿入の寢間着へ綿を入れてゐる。今夜中に仕上げて置かねばならぬといふ。けふの便りに、今年は山はもう霜も降るとあるさうだ。

自分はこちら側へ轉んで物を讀む。暫くして女中は、さあすみました。あとは私がいたしますと言つて、着物を抱へて行く。姉は疊に落ちた綿屑を拾

ひながら、けふは午から中じつと縫物ばかりしてゐたから、あんたとは永らく會はなんだやうな心がする。少し肩が凝つて來た。久し振でお針をすると第一にこゝが痛くなる、と言ひつゝ、親指の先を見詰てゐる。お京は行つてしまつてゐるやつぱり言ひ出し惡い。何故か妙に、あんな話をすると姉が羞しがるだろうといふやうな心がする。くす〳〵してゐる内に、姉は氣が向いたからと言つて、床の間の琴を下ろし調子を調べはじめる。それからいろ〳〵の話が出て、手紙の事はとうと話さずに寢てしまふ。

並んで寢てゐる姉は、羨ましい程すや〳〵と寢入つて了つたのに、自分は目が冴えていつ迄も寢附かれない。寢やう〳〵と藥搔く程寢られない。しよぼ〳〵と降る雨の音に、二た間三間隔てた柱時計が、十二時一時と更けて行く。此間、例の女の事が引き切りなしに頭に纏はる。色々の場面が、一度見

た芝居を想ひ出すやうに目の前に浮く。外の記憶が入り代り間へ這入つて來でも、塗り物へ息を吹くやうに、暴れば乾きして、しまひはすぐ此女の事になつてしまふ。

昔々、七八つの頃に仲よくしてゐたお絹さんの事もいよいよくり思ひ出した。南京鼠の箱を提げて、何とか言つた建具屋の店の鉋屑の中を、ばさ〳〵と這入つて行つて、無果花の木の處から、お絹さん〳〵と呼び出す。障子の内では三味線のお稽古をしてゐる。誰かいの、禮さまかいの、おはいりなさいやと姨さんが呼ぶ。お絹さんが縁へ出て、頃て何か言ふけれど分らない。白足袋へ鼻緒の赤い跡が附てゐる。お絹さんは抜け出る樣にしてやつて來て、こいへ來てはいやぢやといふ。こんどがわしの番ぢやけに、直ぐぢやけに、門口へ出て待つておくれなさいの、と皆にさまりが惡いといふやうな素振り

をする。お絹さんが中へはいると、姨さんが、禮さんはもうお歸りたかと聞いてゐる。無花果の木の蟲が吐き出した、鋸屑のやうな固まりを、指先でいぢくりながら、往かずに矢つぱり立つてゐると、片手の箱の南京鼠ががらくと車を廻す。だれだつたか、大きい女が出て來て、禮さん帶が解けとるにと言つて、後ろへ踞んで結んでくれて、かわいゝ鼠ぢやいのと言つて出て行く。やがてお絹さんが赤い扇子を胸に挿して出て來る。お不動さんのお祭へ詣つてこれを買うたんだと言ふと、あら〳〵車を廻す車を廻すと言つてお絹さんがよろこぶ。あと先きになつて鉋屑の中を駈けて出る。家へ行かうとわいはいふ。お絹さんも家へ來いといふ。——

それから日を置いて、巴屋の奥座敷でおさらへがある。いゝ着物を着て母さまと伴つて行く。庭の櫻に雲洞が點してある。みんなの中へ坐つて見物す

る。お絹さんとこの小母さんが見附けて、卷壽司を鮑の貝へいれて持つて來てくれる。傘屋の爺さんが蠟燭の心を切つて廻る。三味線が鳴り出して、白と赤のだんだらの幕が開くと、お絹さんがきら〳〵しい簪を一ぱいさして、振り袖に長い帶を後ろへ下げて、お汲みになつて出てゐる。わしは嬉しくていよ〳〵お絹さんが好きになる。もう一人のお汲は蟲が好かない。其の内にべろりと舌を出したりなんかして可笑しな風をするから厭になる。お絹さんだけで舞へばいゝのにと思つて齒痒くてならぬ。やがてお汲のお絹さんが其儘ずん〳〵大人になつて、どこの家とは知らぬ小暗い窓の下に、振りの袂を押し當てゝ泣き伏してゐる。排鹿子の髷がゆら〳〵と搖れて、なぜに返事が貰はれぬ、會ひたい會ひたいと泣いてゐる。——何んてもすぐ文の女の事になつてしまふ。

其内にぼろ〳〵の二通の事を考へて、寢られぬついでに一行でも拾つて讀んで見やうといふ氣になる。姉はいつの間にかあちらへ向き變つて寢てゐる。目を覺してくれねばいゝがと祈るやうにしつゝ、徐かに蒲團を拔け出して、衣桁の處へ行く。着物の袂が脹れてゐる。手紙を取出すと、再び徐と蒲團へはいつて、有明行燈を少し搔き立てる。

鼠に喰はれた分を披げて見る。一つは下の半分過ぎしか形がない。薄墨で小貝の繪が摺つてある。一つは只の白い紙だ。この分は全てめちや〳〵て、開けばばら〳〵に小さく切れてしまふ。小貝の間に拾へる文句に後先を足すと、此手紙の屆かぬ内に、十萬億土へ行くかもしれぬ。——何かしら、一品はお前さまの形見にして持つて行く。——髮は剃り落さずに置いて貰ふ。——一つ合點ゆかぬは、お前さまはお家の總領でありながら、なぜに今日迄も

お嫁を取らずにおいてなのか。萬々一、時を待つてわしに添うてやるといふお積りであるのなら、わしやかうして死んでゆくのが口惜しい。しかしそれは愚かな心の迷ひである。――おまへさまはわしの事はすつくり忘れて、いゝ嫁さまを貰うて千代八千代まで榮えて下さい。遠くからお二人の息災を祈ります。――わしや少しもお前さまを恨んではゐぬ。いつ〳〵までも、おなつかしい方だと思つてゐる。これまでかず〳〵はしたないことばかり言ふたのは、どうぞ〳〵お許し下され。いまはの際にたつた一目、遠くからでもお顔が見たい。――何月かの十一日と、さゝがにの絲の如くにかぼそき文字が、かすれ〳〵に亂れてゐる。女は一息〳〵に近づく死期を待つてゐるのだ。

はじめて氣がついたが、切々になつてる方は手が違ふ。たしかに外の女の

手である。肉太に捏ねくつた拙ない字だ。日附の處には文月十二日と、前の分の日附の翌日になつてゐる。切れ〳〵の中から取れる處だけ拾つて見る。見馴れない字だから中々讀み惡い。

「……は女はそだち不申い。また、よめいりいたしまゐりいもの……」といふのがある。

「……これは根もなき世の口のうはさにていへど、萬一これが」

と、間が蟲が喰つてゐれど、

「まことにていとときは、」

と續くらしいのがある。

「……がいよ〳〵せまりぬ」

これは書き出しの處らしい。

「……これを申しのこしゆゑそれが氣にかゝりて……」

とだけで切れたのがある。あとは枯れ葉を揉みちぎつたやうな切々や、鬱のやうに裂けたのばかりで、もう拾へる處は一行もない。拾へたのだつてさつぱり何の事かわからぬが、代筆を頼んでゐるといふのは最早からだが利かなくなつたのにちがひない。かくて遂に息が引けたのだ。枕元に嫁入の衣裳がならべてある。紅友禪の蒲團の襟に冷たく亂れた、ふさ〳〵とした黑髪を片手にたぐつて、泣き〳〵燈し火に黃楊の櫛を扱いてゐる、附き添ひの女の懷に、此手紙は匿されてゐたのかも知れぬ。

ちぎれを集めて、小貝の模樣の一通へ卷き込んでゐると、またもう一つ大きいのが出て來た。

「……れいて、たゝりをはらひなされひやう、くれ〳〵もねんじ上げ……」

眞ん中が破れてゐる。

「……その二十七にてみまかりひと申ひこと、いと〳〵氣がゝりにぞんじ申。それではお家のさかえおぼつかなく……」

といふ文句である。何か男の家には祟りがあつて、それでは家の榮えが覺束ないから、何とかしてその祟りを拂はなければいけないといふのらしい。冷めたい水の中へ漬けられたやうな心がする。再び前の切れを探し出して見る。女は育たぬ。――やはり祟りの所爲であらうか。――そして嫁入して來た女は、――それが二十七で死ぬといふのではあるまいか。こゝの母さまは二十七で亡くなつたと言つたやうであつた。そして三十幾年して姉が來たのである。――自分はわれ知らず、

「姉さん〳〵。」と呼びかけやうとして、はつと氣が附く。姉はすや〳〵と小

さい息に寝入つてゐる。

七

晝寝をしてゐた間に四日の小雨が上つて、午後の日がかん〳〵とさしてゐる。目隱しを取り外したやうにからりとした心持がする。大空は産毛一本程の雲もかすれずに、高く深く、眞つ碧に澄んでゐる。裏の方に小鳥がちい〳〵と啼いてゐる。水の白く落ちる水引花の小椽に兩足を垂れて日向を見る。からだが輕くなるやうない、天氣である。

姉がやつてくる。

「とうと起きたのね。」といふ。下ろし立ての手拭を帶へはさんで、小急がしさうな樣子をしてゐる。お午に起さうか知らと思つたが、それでは寝が足らぬからほつ置いた。もう四時すぎだ、といふ。——昨夜はとうと寝んづくで二人で話してゐたのである。

「わしが目をさました時、何んであんなに目を開けて考へ込んでゐたのか。」とまた聞く。何でもないのだと言つて、下つた手拭をいぢくる。

「どうしても言つてくれないのだから尙更聞きたい。」と言つて微笑んでゐる。

いま考へれば最う何の事もない。祟りとかなんとかいふのは暗い昔の事だ。こんな、日のかん〳〵してる中に、そんなだと黑いものが潜んでゐさうな譯もない。手紙の文句を繰り返して見たつて怖くもない。あれは眞夜中で雨が降つてゐたからである。行燈の灯で考へたからだ。寝られないで頭が變になつてゐたのだつたと見える。

姉は、夕方から酒事をするのだから、その仕度を手傳つてゐるのだと言つて、いそ〳〵して直さまたあちらへ行つてしまふ。

ひとりてのこ〳〵裏へ出て行く。例の榎が、ちい〳〵と啼きかはす何十羽の椋鳥を包んで聳えてゐる。花畠に白い蝶々が出たり這入つたりしてゐる。花を一と廻りして、向ふに並んだ倉の後ろへ行つて見ると、そこの處に外へ出る小門が附いてゐて、戸が半分開いてゐる。

一下は一面の苗木の畠て、向ふに延びた、大きな杉の茂つた小山の麓まて、だん〳〵に高くなつてゐる。杉の苗は下が赤枯れた色になつてゐる。左を限る樹林の後ろから、すぐに高い山が迫つてゐる。右の方は四五町の背い稲田が、中窪の段々になつて、正面の小山の後ろへ曲つた、高い山の根まて昇つてゐる。田の中に離れ〳〵に藁家が五六軒ある。眞に擂鉢の底のやうな山中

である。

苗木の中へ下りてぶら〳〵と田の方へゆく。稲はみんな穂が立つてゐる。ちよろ〳〵と流れる水の處へ來て、暫くの間犬蓼の花を搖つて投げ〳〵する。それから、畦豆の葉を取つて、一寸置きに路へ並べて、蓼の花を一つづゝそれへ載せて見たりする。十人前の皿が並ぶ。一二間行つては、同じやうに野菊を載せたり溝蕎麥を載せたり、しまひには困つて畦豆を搖つて載せる。もう厭になつたから、稲の穂を一本取つて、粒々を一粒つゝ前齒で嚙んで、牛乳のやうな汁を嘗めながら、ぶらり〳〵と引き返す。振り向いて見ると、豆の葉の皿は知らずに蹈んだり蹴散らしたりしてゐる。

苗木の中へ歸ると、向ふの小山から、頰被りをした爺さんが、小籠を肩にしてと〳〵と下りて來る。其方へ向けて行く。

行き合ふと、爺さんは手拭を取つて、お許しなされませと言つて丁寧にかぶむ。乙吉の處にゐた爺さんであつた。脊の小骨を植ゑたやうな頬鬚が、日にきら〳〵と光る。何だと言つて籠の中を覗くと、椎茸を澤山取つてゐる。

「此山に生へたのか。」と顎で指すと、爺さんは小腰を屈めて、

「はい？お墓へおまゐりてございますか。はい〳〵。お墓は此山の上にございます。」と、辻褄の合はない返事をする。忘れてゐた。蟬であつたのだ。しかし此山に誰の墓があるのだらう。一家の墓地があるのだらうか。序でに上つて見る氣になる。

雜木の中をうね〳〵と上る。木の葉を漏る日影は、最早、赤が〻つた夕日の色である。松林の中の、赤い土の平みへ來る。こゝへ來ると景色がずつと開ける。

すぐ向ふに險しく聳だつ山の裾を、一町巾の大川が、ゆる〳〵と渦を卷いて、眞つ青の淵になつてゐる。大きな岩が兀々と覗いてゐる。こなたの岸の稻田は、足もとからだん〳〵と巾が廣くなつて行つて、三四町行つた處でまた山の續きが横合ひから出て來て、兩方から川をくの字にはさんで遠く走せてゐる。水の青みは日影に薄紫となり、赤みを帶びて、やがて川中の女松の林の處から二つに割れて、白き瀨と碎けて落ちる。それが一つに合すると小巾になつて、末は小黑い山合に淡く烟つてゐる。川の緣に沿ふ一筋の岨路に、四五寸の薄墨色の小舟を水に曳いて、小指程の黑影が二つ上つて來る。後ろを見れば、向ふの山の麓に續く古ぼけた一筋の町が、小さい丘の兩方から、長短に覗いてゐる。右のはづれに赤瓦の寺がある。銀杏の木が三本立つてゐる。小山の左の角から、姉の家の練塀の一角が見える。例の榎が此山里

を領し顔に突つ立つてゐる。

また川の方を見る。横の方で油蟬が鳴き出した。みんなの跡に立ち後れて、只一匹、しんとした山の秋に封じ込められてゐるのである。何やら惘れな鳴き聲が、日影を赤く振はせて、向ふの山まで響いて行く。小路について、丁度其聲の出て來る方へ這入つて行く。高い女松がこんもりと立ち詰つて、絲筋程の日影も漏れぬ。蟬は何の木へ棲つてゐるのか、路が曲れば後ろになつて、やがて最う聞えなくなつたと思ふと、仄暗い路は樫の大木に蓋さて、右手に石の鳥居を見る。そこから小高い石の段々が附いて、上に石燈籠が二つ立つてゐる。上つて見たらそこが姉の家の墓場であつた。

杉の中が小暗く開けて、深い苔の兩側に、墓が高低に並んでゐる。正面に、初代七郎右衛門と大きに刻んだのが、梅擬で赤く包まれてゐる。森閑として

木の葉一枚の音も立たぬ。仄暗いあたりの色に、からだも古く染まるかと思ふ心がする。上を見れば、狹く蓋をした夕空に、白い雲がちぎれ〳〵に迷うて行く。

右の取附きのは十三代七郎右衛門の後妻とある。お爺さんは繼母にかいつたのだと見える。其次の墓の花立の間から、小さい蛇の抜殼が覗いてゐる。摘んで引つぱり出さうとしたら、ぷつりと切れる。石の間を覗くと、一寸ばかり下を、胴中がずつと挿つてゐて、向ふへ出たところに、頭の方がだらりと二三寸下つてゐる。蟬の抜殼が丁度其頭と上下に向き合つて、斜めに喰つ附いてゐる。何事か冷めたさうな話をから〳〵に囁き合ふてゐる。指で障れば、蛇はふは〳〵と動く。蟬は力を込めて嚙り附いてゐる。後ろの杉の根元に火を焚いた跡が殘つてゐる。此墓の裏面には、

……元治甲子元年四月十日歿。行年七十。有二男。文政戊寅十二年投資修八津川隄防八里。藩侯賜白雁一双嘉賞焉。弘化丙午三年歳大饑。散穀救二十一村。藩侯再賜銀十枚……前妻名加津……

二十七で死ぬとかいてある。表を見るとお爺さんの双親である。變だと思ふ。お爺さんの妻も二十七で死んで、生みの母親――繼母の方は七十四まで生きてゐるが――生みの母親が矢張り二十七で死んでゐる。向ふ側の角にあるのがおばあさんの墓である。行つて見るとちやんと行年廿七とかいてある。變だなと思ふと、昨夜の手紙の文句が影の如くに想ひに浮ぶ。何だか頭の中が土で詰つたやうな心がする。また此方へ來て廿七と讀んで、それからつぎ〳〵に他の墓を見て廻る。合靈といふのに、十二代の女の子が二人、一つと六つで死んでゐる。十一代の娘が十六で死んでゐる。女は育たぬといふ文句

が何處かに刻んではないかといふ氣がする。十二代の妻は、後妻は六十いくつだが、先妻の方は早く三十二で死んでゐる。

順々に見て歩く。字の讀みにくいのは石の角を押へて透かして見る。其内に、復歿年二十七といふ女房がゐる。十代の嫡妻だ。これで二十七が三人である。じつと立つて考へてゐると、廻りの暗い杉の後ろに夜風の如きものが呪ひだと〳〵と黑く叫んで走つて行くやうな心がする。これはわが神經だと思ふ。何だか早くこゝを立ち去らねばいけないといふ氣がして來る。あとの墓の事は忘れて、知らず〳〵石段の半迄下りて來る。邊りは已に大ぶ小暗くなつて、蹈む石段ばかりが仄かに白い。

ふと姉の姿が物の匂ひのやうに心に浮ぶ。ひとりでに振り向いて見る。石燈籠の片はしに、目の迷ひか、蜘蛛の絲のやうなものが一本下つてゐる。一

尺ばかりで切れてゐるけれど、下の切れ口が土の下にあつて、それが眞つ黑い土の中を、切れるか切れるかと思へど、うねうねと何處までも續いて、末は家の練塀の根まで傳はつてゐて、そこから目に見えぬ程小さくなつて、姉の袂の先へ絡まつてゐはせぬかと思ひつゝ段を下りる。姉の袂が搖れゝば絲はふは〳〵と白く動く。――そんな事がある譯もない。併し兩親にさう言うて、早く姉をあの家から連れて出ぬと、わしが歸るとまた煩ひ出して、二十七になつたら死にはせぬかといふ氣がする。まさかそんな事もあるまいけれど思つて見ても、それでも油斷がならぬといふ氣がして來る。ばかな事を考へるものだと自ら打消しつゝ、はじめの入口の處へ出やうとして、ふと横の透き間を見れば、薄靑く暮れかゝる遙かの空の下に、眞ん圓に淡く出てゐる夕月の中へ、水が二里、白く烟つて流れて這入る。――今夜は月夜である。

八

外の夕闇から這入つて、臺所へ上ると、次の間の襖の透き間から赤々と灯影が見えて、大勢が賑やかに酒を飲んでゐる。わつはつと一度に笑ひ出す。はじめて厭な夢からさめた樣な心がする。お京が見附けて、

「お歸りなされましたか。すぐにお風呂へお召しなさんせ。奥樣が先刻から探してお出でございます。」といふ。

酒を飲んでる緣側を通ると、障子に五六人の影法師が寫つてゐる。大きく廣がつた女の影が、何かしら皿へついてゐる。肘を張つてつゝ〳〵と素麵かしら啜るのや、年取つた聲でねち〳〵と理屈を捏ねて、まあ聞かんせ聞いてくれなんせ、と手を動かすのや、互に酒を注ぎ合ふのや、色んなのが影畫の

やうに寫つて、わい〳〵言つて飲んでゐる。知らぬ娘が手傳ひに來てゐるやうだ。一番先の障子が少しあいてゐる。顏を反けて通り過ぎると、

「あゝ、もし〳〵あなた樣。」と、屋根のお樋が呼びかける。

「風呂へ召すのぢやわいの。」と、後から來るお京がいふ。風呂へ濱つてゐると、「乙吉や。與平や。」と、お樋が聲を絞つて迫つてゐる。一座がしんとなつたかと思ふと、二人の若者が節を揃へて小唄を謠ひ出した。黃ろい聲と胴間聲とが甘く一つに調和してゐる。駈け出して行くやうな、景氣のいゝ唄である。黃色い方が乙吉かと聞いたら、お京は、はい、と言ひつゝ着物を片寄せてゐる。落舟の唄ださうである。何とかよをゝいと、仕舞を細く長く投げる。

「落ちてゆく時や、よをゝい。」とまた謠ふ。じやぶ〳〵〳〵と、側から口早に川瀨の音を入れる男がある。

「落ちて行く時や、躑躅が赤い。着けば大濱の、よをゝい、灯が赤い、よをゝい。」と謠ふ。

お京が背中を流してくれる。大濱の灯といふものは何かと聞くと、何でございましやうと言つてくす〳〵笑ふ。女のゐる處らしい。

九

二十五間の椽に月夜を踏んで、奥の間へ這入つて行く。上の間に點した朱塗の雪洞の灯が、黑びかりの段々にゆら〳〵と流れ落ちてゐる。雪洞の向ふに、袂の振りに紅友禪の覗いた姉の後姿が、待ち詫びたやうに火鉢の灰を掻いてゐる。上つて行くと、こちらを向いて、まあ何處へ行つてゐたのかといふ。其邊を歩いたのだと言つて、赤い高足膳を向け合はして座る。火鉢の小

鍋がくつつ〳〵と煮える。

「なんぼ探しにやつてもゐやせぬし、いつから待つてゐたか知れぬ。今夜は、お爺さんは院主さんが見えるんだし、こちらは二人で面白くお月見をしやうと思つて、通ふに遠いから、いつそ何もかもすつくり持つて來た。御馳走は何にもないが、今夜のはわしが拵へたのだから。」と嬉しさうにしながら、小鍋を下ろす。もつとこちらへかうお向きと言つたが、

「あら、あんたは赤い顔をしておいてぢやないか。」

「少し火照り出した。風呂から出ると、何とかいふあの頭の禿げた番頭に無理矢理に引き入れられて、とうと四五杯飲まされて來た。」

「まあ、いらぬ事する爺さんだ、」

それではもうたべられまい、とはづみが拔けたやうにいふ。

「まだ飲める。もう少しぐらゐ。」

「そんなら折角だから、難儀にならぬやうに、一つか二つお重ねや。」と小德利に燗をして、鍋の湯豆腐をついて、胡麻味噌をかけて赤い刻み生姜を入れてくれる。姉も箸を取りながら、いゝお月夜ぢやないかといふ。

障子の外は、深い水の底の國のやうである。一面に碧くさした月影を掻き別ければ、手に白き泡と割れ返るであらう。池の面が絹蒲團の上を行くやうに歩かれさうで、木間に潜り入れば、枝は藻草の如くにゆら〳〵と靡きさうだ。小黑く向ふを限つた松山は、撥れば薄紙の如くにべり〳〵と破れてしまつて、二三十里の只碧白き國が、此高殿の領に入るだらうと思はれる。山のはづれから庭の色は白みがゝつて、上へ延びると再び碧く空となる。影のごとき阿妻屋の屋根の上に、星が一つ見えてゐる。靜かな月夜である。もの言

へば、わが聲が水の上を渡つてゆく。

「それはさうと、紙屋の、おようさんはどうしてゐてぢやろ。」と、姉が突飛な事を言ふ。

「いまふいと思ひ出した。あんたは、あの人が大好ぢやつたろ。」

「なぜ。」

「ほゝゝ一寸ぐらゐ好きぢやつたろ。どこかで貝殼を澤山もろて、それを入れる袋をおようさんが拵へて來ておくれた事を覺えてゐてか。桔梗紫の甲斐絹で裏が白で、緋縮緬の紐がついてゐた。」

「あれからもう五年ばかりになる。あの頃わしは兎を飼うてゐた。いつだつたか、お庸さんが家の二階で泣いた事があつたろ。」

「あんたが何か言うて？」

「いゝや、それでは姉さんは知らんのだ。」

「今ゐる處はさびしい島ぢやと聞いた。」

「あゝ。この夏海水浴に行つた時に、山へ上つたら、おようさんのゐる島が、潮路のはてに微かに見えた。其時はおようさんの事は忘れてゐたが、今考へると、あの島がそうだ。」

「さういへば會いたうなつた。この山へのぼれば沖に其島が見えさうな心がする。」

月がさら〳〵と橋のかなたの水草の中に碎ける。お京が鰻を燒いて持つて來る。お湯へ這入れと姉がいふ。

「只今富やんが這入つて居ります。誰れとかゝ、見つけないお方が八幡さまの方へ行かしやつたといふのを聞いて、あそこまで行つて見ましたさうでご

ざいます。」といふ

「まあ、かわいさうに。禮さんあんたを探して歩いたのだ。」

椀の蓋を取れば中に椎茸と玉子の黄味を着た高野豆腐とが這入つてゐる。

「是はあそこの山で取つた椎茸か。」

「あら、あの椎茸の處へ行つて見たの？」

「日に干さないと直ぐは食へないのだろ？」

「まあ、あの山へ上つてゐたの？」

「あゝ。」

「ひとりでか。」

「一人で。」

「どうして椎茸のある處が別つたの？」

「椎茸は見ぬ。」

「あしこの杉の中へ這入つて行くと、奥に墓場があるが知らんぢやろ。」

「墓か。」と、それとなく雪洞に姉の面輪を透かして見る。

「わしが追つ附、埋まる處だから、いつか行つて見て置いておくれ。」といふ。

「いやだ姉さん。」と盃を置いて、もしや二十七の事を知つて居るのぢやないかと考へる。

「いやだ姉さん。そんな、死なんかするものか。」

「ほゝゝ禮さんなぜそんな顔をしてゐるの。酔ふたのか。」と嬉しさうにさし覗く。姉は何にも知らぬらしい。いつまでも知てくれるなと祈るやうに思ふ。

「あれ。」と姉がいふ。笛の音が月夜の中から傳はつてくる。お爺さんか院主さんかと姉は耳を聳てる。姉の白粉の匂ひが來る。目を閉ぢると、文の女

が、芝居のお染のやうな姿で想ひに浮ぶ。丁稚がそつと出す文を、あたりを見る〳〵受取つて、帶へはさんでそは〳〵と、二重の暖簾へ這入ると思ふと、女は煩らひに艶にやつれて、床の上に髮のほつれを搔上げる。白い小肘に紅友禪の襦袢の袖口が絡まる。目を開けば、姉は宙を見る目で聞いてゐる。笛の音は融けて月夜と碧むのかと思はれる。お京がまたやつて來る。

「あの乙吉があなたに。」と言ひかけて、

「一つ私にお酌をさせて頂きませう。」と莞爾やかに迫つて、

「乙吉が、舌が縺れてよく別りませぬが、あすは舟を出すと申します。」

「それが？。」と姉が聞く。

「あなたあすお立ちなのでござんすか。」

「あら。」と姉は愕いて、

「禮さん、まあ、わしには知らぬ顏をしてゐて、あの、いつ乙吉に約束したの？」

「こないだ頼んで置いた。」

「いやぢや禮さん。あすはまだ水が引かぬから船は出ぬ。」

「水はもう大丈夫でございますさうな。淵が青うになつて居ると申します。しかしお歸るのはあすには限りませぬ。」とお京が口を添へる

思圖〳〵してゐてはいつまでも切りがつかぬ。いつそあすにしようかと考へる。

「私やも少しは泊つて貰へる筈でゐたに。」と姉は訴へる樣にいふ。

「そしてあしたは炭を積で落ちるんでござんすけに、汚ならござんすけに。」と雪洞の蠟燭を覗いて見て、お京は立つて行く。

「それは面白い。唄の文句を其儘だ。炭積んでゆこ十三里。」

「ほゝゝさつぱのあれてもう覺えなさいました。」とお京が段々の處で振り返る。

「なに、これや今宵聞いたんぢやない。こゝへ來ぬ内に疾うに城下で聞いて來た。城下見にゆこよをゝい。」と先刻の節の眞似をして、お京の据ゑ注ぎにしたのをぐいと飲む。

「ほゝゝゝ。」とお京が笑ふ。酒が頭へ上つた。笛はまだ絶え〳〵に續いてゐる。

お京が行つてしまふと、

「禮さん。」と、姉が縋り寄つて、

「あんたが歸つたらわしゃ。——ほんとにあしたが歸る氣か。」と膝に手をかけ

てさし覗く。兩の睫毛に見る〳〵涙がにじみ出る。何だか——二十七といふ事が氣にかゝる。さう思ふせゐか、姉は髪の毛が餘程少なくなつたやうに思はれる。

お

久

二郵便局の裏に赤い警戒の旗が掲げられた。漁船はさつきからすつくり路傍まで引き上げられる處である。板屋根には石を置き加へる。葉茸には縄が縺り渡され、古い庇は括り留められる。家々には皆な龕燈提灯を用意して、此夜は裸灯を置くなといふ長老の觸れである。――灣の入口の、自分のゐる二百戸許りの漁師村は、小雨の中にも此夜襲はれるかも知れぬ災害の用意に搔き亂されてゐるのだつた。自分のゐる家は、丘の陰になつてゐるのだから、いつも何の心配もないので愕かない。たゞお久がい外に出てゐる小桶や竹竿を片附けたり、裏の木切を物置へ納つたりしたゞけである。母親は親戚へ加勢に出て行つてゐる。お久は上り口の一と間で、毎日の通りに八拵へ上げた釣針を油紙に包んで袋へ入れて、店の印の版行を押してゐた。――自分は後ろの六畳の、煤けた壁に縋つて、二三日すれば最早たゞ慣れた配

憶だけになつて了ふ女の、自分に別れた後に續く夜晝を考へた。刻々に夕方が迫つて來る。女が夜に隱れて向の町の十字架の下に伏す時刻が迫つて來る。夕方になると濱の筋のざわつく物聲が止んだ。外は箱の中に這入つたやうに靜かである。石崖に當る水のびたゝいふのも聞えなくなつた。物置の屋根裏に鳩のぽう〳〵と啼くのが、夕刻の影に溶け入つて、仄暗く障子の紙に染みるのを見詰め乍ら、自分は後での女の心を考へた。ほつれ易き油少ない束ね髪に、黑い目のしめ〳〵した、小鳥の樣な小女は、何故にがうした自分に從うたらう。自分は此女の心に痛みを刻んで了つた。女は五六日何も言はないで涙ぐんでばかりゐる。自分は此二三日は、自分が此小鳥に飽いて、何か變つたもの、欲しいやうな後悔の心持を、勤めて殺すやうにしてゐた。もう二三日いかうしてこゝにゐる內は、――せめて此終りの二三日だけは、――

心の交りものを除けて、ただ一筋に女を戀じがつて置いてやらなければ、何だか餘りに女をいゝ目に會はしたやうで、自分で自分に責められる。女は三月の體になつてゐるのである。

考へ返せばかうした僻陬に漂うて來た自分が、荷船の便を借りて此古い代に似た浦に這入つたは四月の十何日といふ日であつた。もとより何の定つた當もなく、たゞ都會から隔つたうら淋しい處を選んでは、行き盡くす果もないもの、樣に迷ひ渡つて、失ひたる戀を考へ續けるのを、自分ばかりの受けてゐる悲しい許されてあるやうに考へてゐたのである。船から上ると、右側には水際一帶に網を干し聯ねてゐた。さうして少しばかりさきには、小さいけれど、飛び渡る事は出來ないらしい溝川が、漁師の家の間から斜かひに走つてゐる。その、さきにはまた網が續く。漁師や小汚ない女たちが、日影の中

に長い影を投げて網の上を往きかへる。かうした容子で、溝川が一つ見えると、定めなき自分の行く方向は、どうにでも換へて了ふ。自分は短かい石垣の突き出た下に下りて、右手へ向けて、濱大根の咲き續いた砂濱へ、此時分にはもう二度とは附けない事と思つた足跡を、居坐つた船と船との間へ一足〳〵と印して、漁師の家の合ひに往來への出口を尋ねた。つと投げ附けられたやうに自分の前に下りた燕が、糸に引つ手繰らるゝやうに引き返して上つた處に小路を見た。往來に出ると、灰色の戸や柱の、木目の浮き出た門口の靜かな日影の蓆の上に、小烏賊や小豆などが干してある。何處から何處へかいてるのだか、針金のたつた一本しかない電信線が、障ればぼろ〳〵に拐れさうな古げた藁屋根の並びの上を渡つてゐる。此の一と筋しかない電線は、幾日も海を渡り〳〵した自分に、また、層隔たつた淋しい僻在へ來たといふ

物懷かしい心を增させるのであつた。此針線に多くの燕が列んでゐた。他に行く處もないやうに固まり合つて棲つてゐた。何時まで經つても自分に返らぬ女を戀ふる日には、此何やら懷しい、濱の小村の日向に、かうして棲まつた燕が、何だか物哀れてならなかつた。さう思ひながら、自分は淡く失つた女を戀ひたのだつた。女を戀ひつゝ此路筋をまた多くは行かぬ內に、片側の、下駄や瀨戸物や、色々の品物を賣る小さい店から、手拭を被つて出た素直な誇りに生々した色の薄白い小女を見た。自分は失つた女を戀ふる心で、此女の後姿を振り返つた。薄赤い小帶をくる〳〵に卷いて、紺の筒袖を着た背中に、見なれぬ形に束ねた髮が下つてゐた。女は直ぐに曲り角を曲つた。

自分は、一寸足を休める積りで這入つた村の小宿に、たうと此夜を泊る客

となつた。暗い夜だつた。其夜自分は、何故ともなく寢がけにのこ〳〵外へ出て、約束でもして置いた樣に、畫の女の行つた方角に、何の用もない足を向けたのであつた。さうして大凡女の這入つたと思ふ邊まで行つて、暗い夜の中を切り拔いた樣に灯影のさした、或一軒の家の障子戸の下に、會ひに來た戀人の如くに立つたのである。障子の内には、年の入つた女の、靜な話が一寸聞えただけで、それからはいつまでぢつとしてゐても、女の影は射さなかつた。自分はそれで用事が濟んだやうに、再びのこ〳〵宿へ歸つた。自分は知らず〳〵にした此仕業を、かうじた寂れた村の宿の一夜の印になる樣に考へつゝ、一人蒲團に這入つたのであつた。宿の亭主は自分が昔使つてゐた事のある樣な心持のする、氣の置けぬ年寄りであつた。自分の蒲團の頭に坐つて、何かと案じる心で自分の事を聞く。自分は翌日一日立つのを延ばして

此年寄と話しをした。

外へ出れば、濱には濱大根の花に燕が飛ぶ。見知らぬ漁師たちは、直く話しをしかけて何でも自分のいふ事をしてくれる。仕事する女の群の素朴な低い小唄が聞える。自分は果てしない外洋に臨んだ、此芋畠ばかりの、靜かな村が戀しくなつて、家から歸れと迫るまで、失つた女を考へつゝ此處にゐる事にしてたのである。亭主は、自分が夜々本を讀むのを店に集まる漁師たちの騷ぎに妨げられるのを心配して、向ひの丘の蔭の、釣針と網糸を賣るお久が家に話しを附けて、裏口の隱居部屋だつた四疊を借りてくれた。

お久の家はお久と四十七八の母親と二人だけであつた。小鳥のやうなお久は矢張り例の束ね髪をした、紺の着ものに帶をくる〳〵に卷いた女の一人である。家はかうした小さい商ひをしてゐるけれど、以前は大分資産も有つ

たと見えて、早く亡くなつた。お久が父は、昔は帶刀を許されてゐたのだと言ふ。母親は町の生れの女である。早く夫を亡くして、一人で一家を擔うてゐる婦人によく見られる、情合の固くなつたやうな、分別の勝つた容子は少しもなく、たゞ素直な情の深い婦人である。さうして何かの調子に、物堅い古い筋目の生れだといふ事が現はれてゐる。一寸考へ入るやうな目附きをして、落した眉を上へ引き上げるやうにして、其の中を小指の爪でさし〳〵と痒く、母らしい癖がある。

自分は何だか此のお久の母親が自分の長上のやうに思はれた。巻つた夕方なぞに、店の板の間の小さい疊の上に坐つて、針を擦つてゐる母親の、構はぬ髪形の容子を見ると、何だか出來るならいつまでもかうしてゐたいと、力になつてやりたい心になる。その内に逗留も三四十日の上に重なつた。母親は、自分をお久と同じやうにお桶に水を汲ませたり、網糸の束を選り分けさせたりした。毎朝門口を掃くのは自分であつた。度々お久の代りに使にも出た。自分は此やうにして、自分の家の事も自分が自分である事も忘れて、退屈すれば村筋へ出て話しをしたり、漁師の一人が次の町へ用足しに行くのに喰つ附いて行つたり、船に乘せられて沖合迄出たりして、世を送る。夜は悲しい物語を書いた本を讀む。よく、店の夜仕事の網糸の束の上に寢き忘れられたその本を、お久が、自分の室へ持つて來て、灯を消しといて行つてくれる事もあつた。

自分は此女に色々の悲い話をした。母親がゐないと女は側へ來た。さうして話を聞いては涙ぐんだ。自分は此涙を誘ふ話を好く小女に、母のゐない時を偸む樣にして一緒にゐるのが好きだつた。其は何の故とも知らなかつた。

後で考へれば、恁してゐる間も忘れ難い、失つた女の戀しさが、物語を讀むやうに心に續く自分が、此の絶海の漁村にゐて、此小女と親しむのが、例の女を戀ふる物語に哀れな頁を加へるのを喜んだのだ。しかし自分は後では此挿話に早く終りを附ける事を知らなかつた事を悔いなければならなかつた。

二人がよく並んで立つた裏の物置の壁の根に、酸漿の木がいくつも高低に生えてゐた。袷を抜ぎかへる時分は小白い花を附けてゐた。夜昼は昨日と一昨日の區別もなく、知らない内に經つて、飛びかはす蜻蛉の影の暑い日々となつた。或日、物陰に蓆を敷いて、本を讀んでゐると、物置の横から出て來た女は、自分の側に膝を突いて、一つ摘つて持つて來た、赤い酸漿の被を開けて、徐に心を繰り出しかけてゐたが、やがてぺりと球の破れ潰れたのを取落して、ほろりと涙を零した。さうして兩袖を掩うてしく〳〵泣き出した。

自分はそれだけで何事かといふ譯が刺されるやうに心を突いた。

久は母からいわが體の容子のちがふ事を言はれたのであつた。

それからは二人は壓へられる樣な日夜を惑ひ〳〵重ねた。その間に、打ち寄る藻草の色も變つて來た。夜毎の星の影も低くなつた。家からは早く歸れと責めつけられる。目の前の女の片附には當惑して、腐れるやうな心に閉されたの。——

其二と月の苦しさも、今日になつては最早記憶の中へ移つて了つた。自分は女を不憫と思ひ、自分の責にも刻まれるけれど、女が自分の側に來ればし〳〵と泣くのが厭になつた。女の目の、黑い潤ひも、餘りに悲しく心に浸みる。早く此處を立ちたい。放された心になつて廣い息をしたい。女には罪だけれども、別れた後は拭き消したやうに忘れ得る自分ではない。いくつか

の國を隔てた外洋の岸に、自分の子を抱いて泣く小女を考へれば自分も泣かう。自分も泣けば女はもう許してくれなければならぬ。早く絡る糸の縺を切つて出たい。目の前に見る女の涙よりも隔て、戀しい自分の心を見たい。――

このやうに考へつゝ此十日ばかりは女にもろくに口を聞かなかつた。もう二三日すれば別れるのだ。女の白い罪も、母の被いてくれる罪も此宵は洗はれて了ふといふ。自分も此處から自分の罪の許しを祈らう。夕方も最早暗くなつた。壁に絶つて暗くなつて行く自分の後ろへ、お久は灯火を置いて行つた。

お久が十字架の前に跪くのが迫つて來た。

母親も夜に入つて歸つて來た。海の上はだい黒い雲が慌しく北へ〳〵と走せつゝ夜になつたのださうだ。村人は辻々に集つて、大雨と水の狂を待受てゐるといふ。古い代に續く樣な浪の音が岸を嚙むのが聞え出した。先程死ん

だ樣に靜であつたのは、此宵の中に狂ひ出す默示である。此二時の靜さが村の心を威すのだ――。母親はかう言つた。

「此やうな小怖しい夜に、と、お久は言ひつゝ、束ねた髪に小巾の赤い絹布を卷く。女が目上の人を訪れる裝ひである。母親も一處に蓆の雨具を着た。さうして二人は暗に隱れて出て行つた。

跡に一人小暗い灯影を守る自分は、山二つ越えた彼方の、町といふも名ばかりに、古びた板葺の小家の集つてゐる中に住む、歸化した耶蘇の僧侶の、あの破れかゝつた住居を考へ出さずには居られなかつた。自分は一度、村の漁師に伴れられて、そこを通つたから知つてゐる。塵埃を浴びた大きな枯れかゝつた榎の下に、傾きかけて立つてゐる家である。これが切支丹だと言つて、漁師が怪しいものゝやうに指した。元はフランス人だつた、八十餘りの

白髪の年寄だといふ。昔は城下に囚はれて牢屋にゐたのださうで、物の影のやうに、よぼ〳〵と老いた年寄ださうである。漁師はかう言つた。切支丹といへど、別に怖ろしい事も悪い事もしはせぬけれど、何とはなしに小氣味が悪い。よく小蔭に子供等を集めて、いろ〳〵の異形の、羊に乗つたりした彩色畫を、木の枝などにかけて、悲しさうな顔付で、何だか話をしてゐる。此町のものには昔から切支丹が多い。今でも二三十人から上にゐる。昔は切支丹の繪を踏まぬものは縛られて牢に繋がれた。女子でさへ、斬殺された者が幾人もゐた、と言つて、漁師は、子供の時分の切支丹を取調べに來る怖しい役人の話をして、自分の漁師村には一人も切支丹のゐない事を誇つた。今でも切支丹のものが働きにでも來ると、それが知れゝば井戸の水も汲ませはせぬ。煙草の火も貸さぬ。かうして魔物のやうに厭ふ故、村には居著く事は出來ぬ

と話じた。

自分は此間お久の母が、何といふも、物の間違ひだから叱りはせぬ、跡はわじが片附けるからと泣き〳〵言つて、お久と二人を許してくれた夜、此旅の人の、此後の日々を平かに護り給はれと、自分のために祈るやうに言つて手を合せた時、母親の向つた柱に、小さい銀色の十字架のかゝつてゐるのを見て愕いた。此村に來て老いた此母が、十字架を拜んでゐるのであつた。母親は、殺されてもこれを口へは出してくれるなと後で戒めた。母親は、六つ七つの頃、お上から家に預けられてゐた耶蘇の宣教師の部屋によく行つて、其柔和な異人の膝に眠つた。此小娘と、その母親とは、遂に怖しい掟を潜つて基督の下婢となつた。娘の母は此異人の行狀の尊さに、教に心を引附けられたのであつた。娘は物心のない時分からお久の母になつた後までも、異人

が肩に附けてくれた小さい十字の形を放さなかつたのだといふ。さうしてさまざまの災厄から救はれた。心はいつも穏かにて、恨みも悔いもなしに年取つた。この内證の信心は、自身の影法師にさへ知らせないで來た。法度の酷い娘の時分も、父の信用から、怖ろしい役人の調べを受ける事はなくて通りた。自分を導いた尊い僧侶は、今は體の不自由な年寄りになつて、すぐ此のさきの町にゐる。今の代には何の壓迫もない。故、聖者は白畫町の男女と共にイエスの功を歌うてゐる。自分は麩麵を燒いて水と鹽と青菜とに靜かに命を長らべてゐらるゝ。お久は話して、何も案じるな、お久と二人の罪はわじが拵へたのだ。わじが疾うから知つてゐながら、お久を責めなかつたのは、此子の娘心の願ひを充たさせてやりたく、お前さまも自分の子のやうに可愛ゆかつてあつた。子供はわしの姉の處で生ませる。お前さまは一時の迷

ひだから、そゝを去れば心の傷も取れる。お久は後で悲しからうけれど、悲しみは神さまが護つて下さる故、間もなく心穏かになる。その代りお久は式を受けて、神様の下婢とならねばならぬ。生涯の幸と、母の此度の罪を償ふために、神様に仕へてくれよと言つた。さうして、お久にも自分にも罪はない、自分とお久とを不憫だと言つて母は泣いた。自分はかうして、一人で罪を著て、自分の不行跡を許してくれた母の情をしみ〴〵と心に刻みつゝ、白く夜にかゝる柱の十字架を見た。此宵二人はかうした夜を選んで、一里ばかりある、かの町へ忍んで行つたのである。山坂を越えて海邊の崖路を傳うて、いつ海の狂ひ出すとも知れぬ夜を潜つて行つたのである。母親は危きを怖れない。神は必ず二人を守る。此のやうな夜でなくては、人目にかゝらずに町の神壇へは近づけぬ。年寄つた聖者（三十七八年の昔、その膝に寝た

小娘の名を、まだ記憶してゐられるだらうか、かう言ひつゝ、平氣で出て行つたのである。

母親の心を考へれば、何だか言ひ譯がないやうな氣がしてならぬ。女も不憫である。自分は店の曇の上に坐つて、失つた戀に捕まれる捕話の、餘りに罪深い事を考へた。併しぢつと考へ廻らせば、憫れなるは女ばかりではなかつた。此親切な母親と、小女との濃かい情合を跡に置いて六月も住み馴れた忘れ難い小村から立ち去つて、いつ再び來る事もない自分は、何か知ら無くては濟まぬものを失ふやうな心もとない氣持がする。此網糸の束の上に寫る自分の此影も、もう直きに記憶の中のものになつて了ふのだ。夜を冒して出て行つた二人の氣遣はれるのも、もう長く別れて了つた上の事のやうにうら悲しい心がする。自分は女と燕の巣を見て立つた四月の頃の、汚れない

關係を再び取り返して、もう一年、此村の九月に合ひたくもある。

かうして螺旋のやうに考へ續けてゐる内に、入口の戸の外に五六人の足音が止まつた。戸を開けて、雨具を附けた、村の長老が、龕燈を持つて這入つて來て、火元の用心はと問うて出て行つた。此一團が濱の船の容子を私語きつゝ行く中には、例の宿の亭主の親しい聲も交つてゐた。小雨がぱらり〳〵と板庇に落ちるのが耳に這入る。

自分は何時間かうしゐたらう。出て行つた二人はどうしたらう。もう大木の下の戸口に著いたらうか。雨はぱたり〳〵と大粒になつた。海の音が、代を隔てた物音の樣に傳はつて來る。

再び糸を、引くやうに考へ入つた自分は、程經て、また戸口に來た人の氣色に心附く。開けて這入つたのは母親とお久との歸つて來たのであつた。雨

は非度く加はつた。來るべき何物かを潜めたやうにじやり〳〵と降り頻る。二人の雨具からはたら〳〵と雫が落ちる。

此の夜女は、自分の蒲團の裾に坐つて、愈々二三日すれば來る別れに、短き二人の緣を惜しんだ。さうして、自分の問ふのに答へて、此宵の式の事を詳しく話し續けた。聖者は二人の爲に表口を堅く鎖してくれた。板の間の後には黑い布を垂れて、イエスの縛められてゐる、金色の十字架が懸つてゐる。小さき机の上に目搾く蠟燭の側に、髮の白い、目ざしの智慧深い尊い敎の親が、寬やかな長い黑服の裾に力なく立つて、お久には解らぬ言葉で聖經を讀む。其服の乳の處には、小さい金の十字架が光つてゐる。お久は白い布を背中にかけられて、母と並んで、十字の上に縛られたイエスの足下に伏した。何とはなしに小怖しい心地がして、早くお前樣の處へ歸りたかつた。聖者が同

く十字の下に伏して何事をか祈るのをおづ〳〵しつゝ聞いてゐると、犯して來た罪を悔いてイエスに許しを願ふのぞと母が敎へる。それ故、小さい時分から、種々母の氣に入らぬ事をしたのを惡かつたと心の中で詫をした。それからかうしてお前さまの心を痛ませてばかりゐる事を濟まぬと思つて泣いたのだ。――お久はかう言つて、蒲團に顏を伏せて泣く。

それから、再び自分に問はれて女は話し續ける。泣き出した時、母はもう許して下されたのだといふ。聖者はわが側に立つた。久さん額をお出しなさいと、尊い言葉をかけられる。お久は顏を上げた。母がアーメンといふ。目を閉つてゐたお久は何事の起つたかを知らぬ。何か水のやうなものが聖者の指で額に塗られたのより外はしらぬ。水の雫が額の上に落ちた時、聖者は、「久さん、もうお前の心も體も神さまのものぞ。」といふ。お久は振へ戰く心

がした。さうして、濡れた額を拭はれる時、涙が頬を傳つた。目を開くと、黒い布の上にかゝつたイエスの縛めの姿が、生きた形のやうに天を見上げてゐる。お久は此尊い姿に知らず〳〵禮拜した。聖者は小さいパンの切れと、蠟燭の灯の寫る小さいコップの赤い洋酒とを取らせた後、解らぬ言葉で讃美の歌を唱へる。かうした後、母と二人を板の間の片隅に、わが著て寢る毛布を敷いて坐らせて、年取つた聖者が自から火をおこして、干した小肴を煮て三人に別ち、自らも食べつゝ、わしたちの罪の代りに死んだイエスの話をしてくれた。

お久は、神が救ひのためにイエスを天國から下した事、アネモネの花咲く國々を、神に救るゝ幸を敎へつゝ巡つたイエスが、エヂプトの女王の惡みの下に殺されたるを、女共が寄つて血を洗つて土を掩うた事、埋められたる

イエスが土を開いて天の父に歸れる事、それ以來、イエスが名に於て死するものは天に行くといふ事、――此やうな話をうろ覺えに話した末、お前さま に別れた後は、神さまがお前様に代つて救うて下さると言はれた。二人が別れるのも約束事だと言はれたとて、お久は涙になつて、だから、わしはもう情ないとは思はぬと言つて泣き伏した。

かうしてゐる間に雨は激しくなつた。風がちく〳〵出だした。壁の外の木の枝がざわ〳〵と鳴る。しばらく立つと、村筋に法螺貝を吹き出した。暴の來るべき知らせであつた。

自分は夜中に目を開いた。海が轟く。怖しく轟く。狂ふ雨が投げ附けるやうに板戸に吹きかゝる。自分はいく度も眠りを破られて、凄まじい夜だと思ひ〳〵切れ〳〵に寢る。翌る朝お久の母に起されて出て見ると、庭一面に屋

根葉が吹き散つてゐる。丘の上の松の大木の股が割けてゐる。庇の一つが吹き落されてゐる。外へ出て見ると、屋根といふ屋根は方々を剝ぎ捨られて、半分腐つた茸葉が、犬小屋の中のやうに往來へ落ちてゐる。巨浪の飛沫が濱の家々の壁に撲ちかゝつたといふ。

濱へ行く曲り角を曲ると、泥水の走しる往來に、焚火の炭や、朽ちた板のぼろけた切が、低い濱へ向けて漂うて行く。家々の門口は、みんな水の中から引き上げたやうにじく〳〵になつてゐる。小汚い子供等が敷居などに悄んぼり立つて、著物の裾を嚙んだりしつゝ、通る人の顏を見上げてゐる。

自分はそれから古箱のやうな郵便局の横手まで出て行つて、沖合まで赤土色に濁れた、曇つた海面を見てゐる時、四月に此村へ來た時分に、往來で見たあの小女が、裸足になつて、小急がしげに笊にお櫃を入れて持つて行くの

が目に止つた。側にゐる漁師の女房に、あそこに行く女はと問ひかけると、あれはお前さまが見知らぬ筈だ。此年の五月時分から、たつた此間まで母親の村に行つてゐたのだから、お前さまは知らぬと言つた。母親が去年夫婦別れをしたので、女は兩方へ行つたり來たりしてるのだと言つた。たしかに自分が此村に這入つた時分に見た女である。自分は此時捨てゝ行くお久に較べて考へた。此小女を見送る位の淡い戀しさの心持でお久と別れて行ける關係であつたなら、お久はどれ程仕合せであるか知れないにと考へた。

自分は此翌日、往來の藁のまだすつくりとは取り片附けられない中を蹈んで、お久と別れた心を、陸路の旅へ運んだのであつた。——戀の外に何ものもない、年の少ない日の、返らぬ戀の話に挿まれた一つの罪深さ挿話は、暗い冬の夕方のやうなる悔を、自分の心の片隅に刻んでゐる。

烏物語

小さい自分は、何の譯も知らなかつた故、仄白い水に臨んだ、生絲を取る古里に、母の伯母の家を自分の家の積りでゐた。それは、五六本の榎の大木が、門の内を古い代の色に薄暗くした、大きな構への家であつた。これを自分の家だとばかり信じて、母の從兄を父さま父さまと言つてゐたけれど、本當は母が十九の年に此家のかゝりものになつて來て、腹の中の自分を生み落してから、二人で此の家の厄介になつてゐたのであつた。城下の娘であつた母が、こゝへ來てから里の仕事の稽古をして、かよわい體で、家のものと同じに働いたりしてゐた不慣な胸の中を、自分は少しも知らなかつた。考へて見ると、自分の若い母の名は、悲しい女の名であつた。

それは母が亡くなる少し前の事であつた。自分は母に伴れられて、水の向ひへ灸を据ゑに行つた事がある。——自分は生れが弱くて、小さい内から煩

らつてばかりゐた。それがために母の辛い心をどれだけ痛ませたか知れなかつた。母は何事も私の乳が惡かつたからだと言ひ〳〵して、自分の寢入つた跡などで獨りしく〳〵泣いてる事があつたといふ。早くから色々に手を加へて見たが、どうしても心が丈夫にならないので困つてゐた。すると水の向うの町に、北の方の國から、年取つた爺さんで上手な灸をするゐるのが、五六年ぶりとかて廻つて來てゐるといふ話を聞いて、母は最後に此灸へ當つて見る事にしたのである。

丁度五月の蠶の終了かけてゐる大事な場合なのに、家の妻女は子供が出來るので寢てゐたから、母は、一人で蠶室の指圖をしてゐて、忙がしい時だつたのだけれど、自分が下女なんかとは行かないと拗ねた故、愚圖ついてゐると灸者は往んでしまふといふ事だから、仕方なしに母が自分で伴れて出たの

であつた。

二人は表の桑畠に、夜中から桑を摘んでゐた女たちの、帶に挿した提灯の灯が、薄淡く白みかゝつてゐる時刻に濱へ出た。久吉といふ十五六の下男が供に附いて來る。自分は、向ひの町といふと、樋口の姐さんの家があるといふ事と、影さまの祀つてある處だといふ事だけ知つてゐた。影さまといふのは、いつの代の事か、水を聞んてゐる此古里の浦々へ、はじめて蠶飼を敎へたといはれてゐる、何々影姫といふ長い名の女の神さまである。里の家の戸口〳〵には小さい其お社の繪が、ちぴた版行で黃色い紙に摺つて、お護りに貼つてあつた。

船は四角な帆を張つて、仄かな淡水を斜かひに渡る。二十二三の、お歯黑を附けた、色の小白い小間物賣の女と乘合はせる。女は母と話をしたり自分

に紙縒て犬を拵へてくれたりして、何だか家のものゝやうな氣のする婦人であつた。此の女は途中の村へ着けて貰つて、大きな荷物を背負つて上つた。水の上は四里。向ひの濱へ着くには大分かゝつた。

自分等の上つた一筋町は、小暗い店々のかみさんたちが、いゝ着物を着た自分の若い母を、わざ〳〵戸口へ出て見たりした。何んにもしてゐない家には、木目のざら〳〵に擦れ出た下し戸が半分下りて、垢染みた着物が挂けたりしてある。兩側の雨溝の緣に草の生え續いた、灰色に古びた町である。母は灸がすんだら樋口のをばさんの處へ寄るといふ。自分は樋口といふのはどういふ家なのか知らなかつたが、をばさんは以前に自分の家へ來て泊つた事があるから記憶えてゐる。灸者の泊つてゐる宿は、分るのは直ぐに分つたが、肝心な爺さんは、急な用事が出來て、どちらかへ向けて昨日出かけたさうて、

四五日しなければ歸るまいといふ事であつた。母はがつかりして、いろ〳〵聞き返して見たけれど、しようがない。しほ〳〵引き返して樋口へ行くまでの事になつた。自分は唯樋口がどんな家かといふ事ばかりを考へつゝ、面白く附いて行くだけの子供であつた。

その姨さんの家は、町の中程の、大きな石燈籠の立つた處から横へ這入つて四五軒目の、竹の格子に黄色く煤けた障子の嵌つた、小さい家であつた。向ひ側はずつと向ふまで大きな桑畠になつてゐる。剝つ子のちやん〳〵を着て玄關へ出て來たをばさんは、

「あゝれ、まあ出し抜けにどうした事い。」とそわ〳〵して、取り散かしたものを片寄せたり、簞笥の鎖にかけた小帶を押入れへ投げ入れたりして奥の間の澁紙の上を小忙がしく片づけた。何事も後になつて知つたのだけれど、此

家は母の一寸した續き合ひで、昔は大きな造り酒屋だつたのが、此時は姨さんがたつた一人になつて此處にひつそくしてゐたのである。伯母の家へかゝつてゐた母は、生れた家は固より、親類中へだつて何處へも出入りが出來なかつたのだけれど、この姨さんだけは内證で母の味方をしてゐたのであつた。

物柔らかい、親切な姨さんは、母が、今日はこれ〳〵の譯だつたと話すのを、ふん〳〵と言つて母親の樣に聞いた後、それでは灸者の歸るまで悠つくり泊つて下さい。丁度い、幸だと言ふ。母は蠶の方が放棄つて置けないから是非夕方の船で立つといふと、それでは網さんはわしが預つて、灸を据ゑてから伴れて行くと、譯もない事のやうに言ふのであつた。母は、自分が母と別れてよその家に泊つたりする事の出來ない事を話したが、

「だつてさいは姨さんの家だもの。」と、最うそれに定つた樣りである。久吉

は影さまの神主の處へ母のお供へを持つて行く。跡で母とをばさんと何事か話す間、自分は縁側へ出てゐた。小さい庭の竹垣に、豆の花が這ひ上つてゐる側に、茶椀の缺らが白く土に埋まつてゐる。母の話し合つた事は何の事か知らなかつたけれど、何か悲しい話であつたらしい。母は涙ぐんでばかりゐた。此程の何日かは、蠶で忙がしい目をして、夜もろくゝ寢なかつた故、痩せた母はいつもよりも非度く顔色が惡い。自分は重たく涙の溜つた其目元を見て、何の譯とは知らぬけれど、何だかいつになく母がいたはしくなつた。

それからは母の言ふ事は何んでも素直に聞いて、もう決して困らせぬといふ事を告げたかつた。久吉が歸ると、母は一緒に影さまへ詣りに出る。詣つても何んにも見るものはないのだからと言つて、自分を家に待たせて置く。

母の出た跡に、姨さんは自分に搔餅を燒いてくれながら、網さんは最う追

つ附十になるのだから、よつくお母さまを大事にして、お母さまの氣を助けて上げなければいけないといふ事を、濕やかに言つて聞かせた。そして、

「綱さんは獨りてこゝへ泊つて灸をすゑて貰ふえのう。今晩だけはをばさんと二人だけれど、あしたは久吉にまた出て來て貰ふからいゝぞのう。」と靜かに聞く。自分は素直にさうすると言つた。さうすれば母の足しになるやう氣がしたからである。

母は歸つて此話を聞いたが、自分を置いて行くのが心許なかつたと見えて、をばさんに聞こえぬ處で、

「綱さんは本當は歸りたいのだらう？をばさんが何だつて仰しやつたの？」と聞き、

「いゝのかい。本當にゐるのかい。それではもし跡で歸りたくなつたら、を

ばさんにさう言つて伴れて來て貰へばいゝわねえ。」と言つて嬉しがつた。

夕方に、自分はをばさんと一緒に母を濱へ送つて行く。をばさんは留守を頼んで置くと言つて、町角の小さい家へ立ち寄つた。

濱へ出ると水は黑く黃昏れかけてゐる。自分の村の方はもう何んにも見え分かぬ。母は別れを告げて後、石段に立つて、影さまへてあらう、目を閉ぢて何事か祈るやうに拜んで船へ這入つたが、

「綱や。」と呼んで再び上つて來て、二三段下りて行つた自分の耳へ口を寄せ、

「綱さん、お母さまが惡かつた。もう灸はいゝから一緒に歸りませう。ね。お前二人でゐるのはいやでしやう？。」と小さくいふ。自分は矢つ張りゐると言つた。

「それではお母さまがまた伴れに來るからね。さつきのあれはちやんと持つ

てお出でかい。」と自分の帶を押へて見る。母と別れてゐる間大事に持つてゐよと、小さいお守の袋を渡して置いたのである。

母は再び船へ這入る。自分は一緒に歸りたいやうな心もする。さう言はうか知らと躊躇うてゐる內に、雜巾のやうな着物を着た船頭が船を突き出した。もう仕方がない。いつまでもこちらを見てゐるらしい母の姿は間もなく見分け難くなる。久吉は屋形の上に腹這つたまゝ黑くなつて行く。一人殘つた自分は急に物足りなくなつて來た。何だかれぎりでたゝといつまでも二度と母に會ふ事が出來ないやうになるのではないかと、先の事が示されるやうな氣がして、をばさんと歸る途々が一人で悲しかつた。

家へ歸ると、小暗い門口に、自分より少し年上の女の子が、足に餘る大きな草履をはいて、戶に縋つて、人影のない向うの往來を見詰めながら悄んぼりと立つて留守をしてゐた。をばさんが一寸と這入れと言つたのに何んにも言はずに、とぼり〳〵草履を引き摺つて、さびしさうに歸つて行く。あれは物の言へぬ子だと姨さんが言つた。大人の櫛の缺けたのを挿して、貧しいなりをして居つた。

夜になる。

姨さんは、母の供へたお灯がお社の燈籠に附くから一緒に見に行かうと言つたのに、ねつから伴れて出ないので、所在なさに門口へ出て見ると、町の角の石燈籠に、知らぬ間に灯が點つてゐるので側へ行つて見ると、火を入れる口に下つた紙がふわ〳〵と搖れて、中のくすぶつた天井に蛛蜘の絲の固まつてゐるのが見える。通りの商ひする家々も、夜は早くすつくり戶を閉めて町筋は暗い。見ると暗い町の半町ばかり彼方にもう一つ燈籠が點つてゐる。

またそれへ向けてとこ〳〵行つて見たら、其處の處の小路の奥に、もう一つ燈籠が點つてゐる。またずん〳〵這入つて行くと、獨りてに濱の影さまの社へ來て了つた。

薄暗い夜の中に、岸に續く松の木と、其間々の小さい石燈籠とが、闇の中に、影の如く浮いてゐる。燈籠の灯は黄色く刹り拔いたやうに點つてゐる。松の中の社の横に、星が一つ、下に映つてゐる——。社殿は水に浮んでゐるのであつた。

神殿に雪洞が一對仄暗くついてゐる。自分は小さい廻廊に立つて、水を隔てゝ、町筋の家の後ろに漏れる灯影を見た。だれだか女の子が一人鳥居を這入つて來る。夕方に門口にゐた女の子である。階段の下へ來て、何んにも言はないで、這入つて來た方を指して、解つたかと言ふやうに小首を傾げる。

すると向うから提灯が來る。それはをばさんであつた。をばさんが自分を探しに來たのである。綱さんはどうして影さまが分つたのか。をばさんに斷はちないで出て來るから心配して、おつうと二人で尋ね廻つたと言ふ。姨さんは提灯をおつうに持たせて置いて、下から影さまを拜んで、自分に格子戸の中に下がつた生絲をもう覗いて見たかと聞く。覗いて見ると雙に取つたいろ〳〵の色絲の、左右の壁に繫がつて下がつてゐるのがぼんやりと雪洞の灯影に見える。をばさんは此絲の事を歸る〳〵話した。あれは村々の娘たちが上げたのだ。娘たちは、あゝして、絲の取れる女になつたといふ事を影さまに見て貰つて、それから嫁入りをするのだといふ。おつうは矢つぱり大きな草履を履いて、默つてとぼ〳〵と後につゞいて歸る。

此夜は生れてから初めて、母に別れてよその家へ寢るのであつた。姨さん

が簞笥から出してくれた姨さんの襦袢を寢間着に着て、座蒲團を卷いて枕にして貰つて、小早く床に就く。片隅に置かれた有明行燈に、燈心押への狐の影が廣がつて寫つてゐる。自分は母を目に浮べながら寢入つた。

翌る朝御飯が濟むと、姨さんが、通へ行つてお煎餅を買つて來いと言ふ。教へられた店は、昨夜の二つ目の燈籠の處である。目の腐つたかみさんが、黑い壺の中から出してくれた、反り返つた煎餅は、一つ〳〵眞ん中に紙縒が通してある。羽根を披げた鳥の形の煎餅である。紙縒を摘んで一匹をぶら下げて、

「これは鳩ですね。」と聞くと、

「いやいの、お前さん、烏ぇの。影さまのお使ひの烏ぇの。」と言ふ。歸つて、をばさんに、何故烏が影さまのお使ひかと聞いて見る。をばさんは目を小さ

くして縫物の針へ糸を通しながら、

「あゝ烏かい。」と言ふ。

「お影さまにゐるえの。まあま、昔は羽根が白かつたのに、たうとこんなに眞つ黑になりました。」と姨さんが其烏になつたやうに言ふ。

「たうと罰が當つた。」といふ。どうしてかと聞くと、

「影さまの罰が當つたの。」と、辛つとの事糸を通して、針先へ頭の油を附け乙縫ひ續けながら、

「お影さまの烏は一匹だけゐるのえの。をばさんが網さんのやうな時分から一匹。をばさんがこんなにお婆さんになつても矢つぱり一匹。」

いつでも一匹しかゐないのかと聞くと、

「えゝたつた一匹ゐるの。網さんおせんをお食りな。」といふ。

「なぜ烏は罰が當つたの？」

「それはねえ……。」と、丁度自分が一枚を割つて食べかけたのを見て、

「おや〳〵烏の羽根が取れましたね。痛い〳〵。羽根が取れたら最う飛べぬ。」と仕まひは節をつけて言ひ〳〵縫ふ。自分は罰の當つた譯が判らないわりに、ばしり〳〵と續けて食べる。

それから自分は默つて寢轉んでゐると、姨さんは

「烏を二三匹おつうにやつておいて。」と言つて自分を紛らす。自分は出て行つた。

おつうの家は破れた障子戸が閉めてある。こゐくつて開けて這入つたが、内には誰れもゐない。上り口の板の間に、竹の割つたのが小桶の水に浸けてある。奥の一と間の古畳に、反古紙がべた〳〵と破れ目に貼つてある。

「おつうや。」と言つて見たが、矢つぱりゐないから、烏を板の間へ四つ並べて置いて歸つて來る。

午後になると、もう久吉が來さうなものだと姨さんが言ふ。午からは門口で蟻に食べ物を挽かせて見た。それから姨さんの縫ひ糸を卷いたりあられを煎つて貫つたりしたが、直きに所在がなくなつて來る。町の角へもいく度も出て見た。外へ出て見ると、お日樣はいつもどんよりと家の藁屋根の上に淀んでゐられる。自分は久吉の來るのばかり待つてゐた。

其夕方、町筋の桶屋の前に立つて、箍をかけてゐるのを見てゐる時、向うから、爺さんの荷臺を擔いだのが、團扇太鼓を叩いて來た。行つて見ると、それは猿を使ふ爺さんである。後へ尖つた茶色の頭巾を着て、山袴をはいてゐる。兩方に擔いだ荷臺の片方に小猿が一匹振袖の娘になつて乘つてゐる。

着物の裾を噛んだりし乍ら、ぞろ〳〵後へ喰つ附いて來る子供の中に、おつうが交つてゐる。手拭で髪の解れをかちげて、小さい子を負ぶつてゐる。爺さんは自分を見ると荷を下ろして、

「あい、い〻着物を着た子供し、一つ見なんしな。」と、提緒を縛つて二つの荷臺を喰つ附ける。それから一寸口上を言つて、亂杭齒をかく〳〵させながら唄をうたつて、くつ附けた臺の上に猿を踊らせる。猿は日傘をさして踊る。おつうは自分の側へ來て見る。それがすむと、爺さんは猿を荷臺の下へ引つこめて、今度は坊主に仕立て〻出した。黑い衣の股くらに、張子の德利をぶら下げて、いろ〳〵のおどけをする。集つて來た女の子なんかゞげら〳〵笑つて見物する。爺さんは、

「さあ、これでおしまひだ。はい、その子供し、一錢出さんし。」と自分にい

ふ。坊主の猿が坐つて手を受ける。自分はお足は一つも持つてはゐない。どうすればいゝのかとまごついてゐると、爺さんはにこ〳〵して太鼓を叩き乍ら、

「早くお母さまに貰うて來なんせや。」と言ふ。

自分は惡い事をした時の樣にどぎまぎして、急いでお足を取りに歸りかけると、おつうが自分の袖を引いて、こゝにゐよといふ素振をして、獨りて向うへ走つて行く。どうするのかと角の石燈籠の處に立つて見てゐると、おつうは姨さんの家へ向けて行つたけれど、中へは這入らない。入口の横の壁に喰つ附いて手を延ばすと、直ぐに引き返して來て、握つて來た五六枚の一厘錢を、子供の間を分けて猿に渡す。爺さんは、

「はい〳〵難有う。」と臺を放して兩方に擔いで、太鼓を叩いて向うへ行く。

おつうはまた他の子供と一緒に、夕方の淋しい町に草履の踵のほこりを立てゝ附いて行く。

家へ歸ツて戸口の處を見ると、此時まで氣が附かなかつたが、柱の横の、竹の串が打ち附けてあるのへ、一厘錢がまだ二三枚殘つてゐた。姨さんに猿の事を話したら、串のお足は、あゝして來る爺さんなどが、自分で一枚づゝ取つて行くやうにしてあるのだと言つた。

その日も夜になつたが久吉はたうとう來ぬ。をばさんは、けふは船が出なかつたのだらうかと言つて慰めた。自分はもう母の處へ歸りたくなつた。

翌る日はしと〳〵と雨のふる日である。昨夜簞笥の上に置いて寢た烏の煎餅が、濕つてぺたりとなつて了つてゐる。しぶさがかゝると言つて縁側の戸が閉めてある故、家中が小暗い。姨さんは表の格子の間で用事をしながら、

いろんな昔の話をしてくれたりしたが、午後はもう話がなくなつた。自分は獨りで何をしても面白くない。久吉はいくら待つても來はしないし、雨たれの軒下を傳うて、おつうの家へ行つて覗いて見ても、母親がわびしい内職の竹箸を削つてるだけでおつうはゐない。雨溝に流れる赤土色の水に、瀦鉾の板へ糸をつけて流したりしたが、それが厭になると、最うする事もなくなつた。外はいつまでもしよぼ〳〵ふる雨が、桑畠に淋しく烟つてゐる。自分は母の處へ歸りたくて堪らなくなつた。姨さんにさう言ふと、姨さんは仕事をやめて、いろ〳〵まぎらしてくれるけれど氣が乘らない。直きに重たい息が胸に溜つて、早く家へ歸りたいとばかり考へる。

其内に雨だけはだん〳〵にかすれて、夕方には本當に上つた。外は白い雲がずん〳〵山の方へ走せる。自分は往來へ出て、知らず〳〵家の前の桑畠の

中へ這入る。桑の若葉に雨がびしよ〳〵に溜つてゐる。小道を少し這入ると、横に切れた路の角へ來る。左の方から水色の帶をした若い女が、番傘を肩にさしてぶらり〳〵來る。見ると一昨日船で一緒になつた小間物屋の女であつた。荷は負うてはゐない。當り前の若いをばさんてゐる。自分を見ると

「あゝれ坊っちや。」と親しげに側へ來て、

「坊っちやはあれからまだ泊つておゐなんすのかい。お母さまと宿屋におゐなんすの？。」と言ふ。自分は何だか家のものに會つたやうな心がする。女は髮をかき上げて、

「お母さまと毎日どうしてゐなんした。いつお家へ歸りなんすの。」

と聞く。自分は歸りたくてならないものだから、つい浮か〳〵と、けふ歸るのだと小さく言つた。そして本當に姐さんにさう言つて、これから直ぐ伴れ

て行つて貰はうと考へた。女は、

「けふ？」と聞き返して、

「此夕方の船に乘りなんすの？それてはまた私と一緒えの。わたしはこれから荷物を取つて、直ぐに船に行きやんす。」

お前さまも、最う仕度をしなければいけまいと言つて、自分に別れて、肩で傘を廻し乍ら、足早に向うへ行く。少しゝて横の方へ這入つて了ふ。自分は矢つぱり一つ處に立つてゐた。桑の雫がぱら〳〵と落ちて、小さなさびしい心に浸みる。

再び往來へ出る。何だか濱の方へ行つて見たくなつた。雨上りの往來をぴちやり〳〵と町筋へ出る。おつうが戸口に踞んて一心に足駄の緒を直してゐた。自分はたうと濱の處までずん〳〵來た。

濱には苫の船が三ばいゐる。眞ん中の船から土鍋のくすぶりが上る。水の上は白い雲が間近に低く散つて行く。石崖の下から、若い男が竹竿で二匹の鵠鳥を追ひながら、膝頭までの水をざぶ〳〵と出て來る。鵠鳥はがあ〳〵啼いて、濡れた石段を上つて來る。自分は此水鳥を珍らしく見てゐると、後ろから、

「坊つちや。」と言つて小間物屋の女が來た。

「さあ乘りやんしよ。」と家の方へ出る船を呼ぶ。右の端のが、

「あゝい。」と言つた。女はお母さまは未かと聞く。母はもう一昨日家へ歸つたと言ふと、

「あゝれ。」

てはお前さんは今日ひとりでお歸るのか、

「あゝれまあ。」

お前さんは賢い子だと、自分の手を取つて船へ下りる。

自分は其儘一緒に乘つて了つた。船には下駄や疊表の荷が積んであつた。女は背から下ろした荷物を裸にして、其風呂敷を疊んで自分の下へ布いてくれる。船は間もなく帆を上げて出る。自分は家へ歸るのが嬉しかつた。姨さんに內證で歸つたのだといふ事に氣が附いて、何だか惡い事をするやうな心がして來たのは、もう大分走せて水の上の夜になりかけてからの事である。

しかし女が色々親切にしてくれるから、姨さんに濟まないといふ事は直きに忘れた。夜が眞つ暗になると、船頭が小さい箱行燈を附ける。女は灯がつくと帳面を出して賣上を控へてゐたが、自分が足へ痺れを切らしたのを見て、おまじないだと言つて敷眞蓆の端を拐つて自分の懷へ入れて、足を伸べさ

せて親指の頭をぐい〳〵と押へ曲げてくれる。さうして痺れが直ると、それては先刻の薬屑を出すのだと言つて、自分の懐へ手を入れて探つたが、

「坊つちや、何かしらこゝにこびり附いてゐますえの。」

と、それを一緒に取り出して灯影で一寸見て、

「ほゝ小さいお煎餅の切れだつた。」と、行燈の臺へ置く。昨日食べた鳥の煎餅だと言ふと、

「あゝ鳥の煎餅えこれは？」

「紙縒で下げた……」

「影さまの鳥のおせん。可哀いさうな鳥。」

から言ひ〳〵また帳面を出して附ける。何故影さまの鳥は可哀想な鳥かと聞くと、

「あれ。坊つちやはまだお知りでないの？さうかいの。……あの鳥は女々の。あれは昔影さまが山におゐなんした時分にの……」と、帳面を片づけて、鳥の話をしてくれる。

女が言ふには――昔々影さまが山へ下りて蠶飼をしてゐられた時、二羽の白い鳥が仕へてゐた。それが日々、一つは北の谷間へ、一つは南の谷間へ飛んでゆき、

「桑の葉を探しては、口へ咬へて來やんした。」

影さまはそれで蠶を育てゝゐた。さうして白い絹を三年織つた。今度は赤い絹を織らうといふ年になると、鳥は谷間へ別れ〳〵に飛んでは行かずに、内證で一緒に後ろの山へ這入つてお話ばかりして、桑は一つも取つて來ぬ。

「いつの間にか、そんな鳥になりやんしたの。」

それ故影さまは、いく度も〳〵言つて聞かせて見たけれど、いつまでも矢つぱり桑は取らずに歸る。しまひには小言を聞くのがつまらないと言つて、二人で谷へ隱れたなり、何日も歸つて來ない。影さまはたいと怒つて探しに行つて、片つぽの烏を、

山の山の、其また山の其の先の、谷を越え、谷を越え、いくつも越して、遠い〳〵暗い國へ追ひなんした。」

跡の烏は女である。それは後ろの山へ閉ぢ込められた。影さまは其内に里の娘の松葉を撫さに來たのを呼んで、蠶の種を一粒與へ、生絲を取る事を教へて置いて、

「もう空へ歸つてしまひなんした。」

里の娘はそれから神妙に生絲を作つて、大切に七つの筐に卷いて置くと、一

と日小雨のぱら〳〵降つた日に、影さまが空へ七色の虹の糸を渡して見せて、一つ〳〵此色々に染めよと教へた。それから皆の娘がだん〳〵に習ひつたへて、浦々は蠶飼ひの村になつたのである。

それは古い昔の事だけれど、内證のお話をした女の烏は、いまだに山から出られない。向うの烏に會ひたうて、日々泣いて許りゐるけれど、どうしても影さまが許しなされぬ。それ故悲しんで〳〵、悲しみに胸の中が黑うなつて、たうと羽根まですつかりく黑うなつて了つた。

「坊のちや、此次お祭の時に影さまへ詣りなんせ。其日は烏が山から出して貰ひやんす。神主が笛を吹きなんすと、山から下りて來て、お團子を口へ咬へて往にやんす。」

いつもほたつた一人で山にゐる。

「山にゐて、會たい〳〵と泣いてゐやんす。泣いたとて會へやんしよう事か。ね坊つちや。可哀想な烏えの。」

かう言つて、女は髪を掻き上げる。

自分は此話を聞いて、なぜ烏は内證の話をしたのかと女に聞く。女は

「ほい〻〻」と笑つて、

「それはまだ坊つちやには判りやんせぬ。」と言ひながら、自分の手を兩手に挾んで、

「まあ小さいおて、。」と言ふ。自分は其内に女の膝にもたれて眠つた。

揺り起されて目をさますと、女は、船が附いた、もうお母さまの處へ歸つたのだと言ふ。自分は女に附いて船を出た。どつこも眞つ暗い、星さへ黑い夜中である。女は小さい提火を附けて、自分の家まで附いて來てくれる。どの

家でもみんな寢靜まつてゐる。女は家の門口をとん〳〵と叩いて、

「もしえ〳〵。」と、いく度も呼んだけれど、いくらしても内へ聞えない。自分は横手の桑畠を拔けて、裏の蠶室の下へ廻つて行く。其一棟の角の處に、母が養蠶中夜更で一寢入りする部屋があるのだつた。女は背の荷物を下ろして、提灯を持つて附いて來てくれる。行つて見ると、樞子の障子に灯影が薄ら射してゐる。自分は、

「母さま〳〵。」と言つて見たが、返辭がない。よく惡戯にする時のやうに其石崖を上つて、障子の下を指て破つて覗いて見ると、板の間の片隅の箱の上に、蠟燭が桝の中に短く點つてゐて、其處に二枚だけ敷いた疊の上に、やつれた母が、斗桝へ片肘をかけて、疲れたやうにうたゝ寢をしてゐるのが見えた。蠶はもう早いのは上がつたのだと見えて、蠟燭の火の陰に繭が仄白く

積んである。

「お母さま。」と言ふと、母は直ぐに目をさまして、不審げにあたりに耳を澄ましたが、再び、

「お母さま。」といふ聲を聞くと、

「あれ。」と愕いて立つて來た。自分が石崖を下りかけると、母は障子を開けて、

「まあ網さん、歸つたのかい。」と突き出した蠟燭から蠟がばら〳〵と下へ落ちた。母は急いで裏門を開けて出て來た。自分に代つて一緒に歸つて來た事を母に話した女は、此時はじめて自分が無斷で歸つたのだといふ事を知つて、

「まあ。」と言つて呆れた。母は繰り返して女によく〳〵禮を言つた。

其夜自分は、母と二疊の疊へ毛布を被つて寢た。母は、姨さんが何んなに心配してゐるだらうと氣遣つたが、自分の惡い事は叱らなかつた。

「はじめからお母さまが惡かつた。翌る日久吉をやらうと思つたけれど、忙がしい時だから、お父さまに言ひ惡くかつたから。」と言つた。自分は母へ歸つた嬉しさに、お猿の坊さんやおつうの事や、小間物賣の女の親切にしてくれた事などを、息をはずまして詳しくつぎ〳〵に話をした。そしてしまひに船の中で烏の話を聞いたと言つて、譯の慥り解らないなりに、影さまの烏は泣いても〳〵會いには行けない烏だと言ふと、何んの返辭もしずに、遠くの事を考へるやうな目元をしてゐた母は、見る〳〵睫に涙を浮べて、

「網さんや。」と自分を抱きしめて、そんな悲しい話を網さんは聞くんぢやありません。」と言つてしく〳〵泣いた。

話は是だけの事である。若い母は翌る年に、十になる自分を置いて亡くなつた。自分が亡き母と自分との身の上を知つたのはずつと後での話である。それは聞かれても話されぬ。色々悲しい譯のある事である。

黒髪

宿の向ひに煮豆なぞを賣つてゐる年寄は、夜々自分の處へ來馴れて、何事をも話し合ふ仲になつてゐた。自分が立つて行くといふ前夜、年寄は、こんな四十里も渡る海の上には最う二度とは來られまい。來てもわしはもうゐなくなつてゐるかも分らぬ。此宵は跡にたつた一つ殘つた話をすると言つて、繩の附いた小德利を提げて來た。蟀蟋の切れ〳〵に鳴く、黑い夜の事であつた。

「戀の話をするのだ。戀は怖ろしい。」と深く言つて、目を閉つて考へてゐたが、

「昔は、國の果てに商ひして廻る、矢船といふものがあつたのだ。」と話に入る。

「それは知るまい。昔の事だ。何故か矢船といふ。船を生涯の住居にして、七八艘が一緒になつて、物の乏しい偏僻な浦里へ商ひをして廻る一團の名である。小間物、藥、反物、酒、陶器、乾物、線香、糸類、袋物、其ほか日々使ふさま〳〵の物を載せて國々の浦里を渡るのだつた。わしは十八の年に佐渡

へ行く船で此海の上に下ろされて以來、自分が矢船の子だといふ事は、此年になるまで唯の一と言も人には言はなんだ。生れたのは何の國の浦の夜か晝か。双親の名さへ慥には知らぬ生立てあつた。一人の母親が亡くなつたのは、まだ三つに足らぬ子供の時分であつたと聞く。それから仲間の紙類、筆、墨、蠟燭、糸物を賣る船に養はれたのである。後の双親が、お菅〳〵とよく言つた故、生みの母の名はお菅と言つたらしい、

私が戀をした女は、ふさと言つた。おふさが船は酒、煮肴、壽司などを賣つてゐた。大きな浦へ着けた時には、おふさが船は石崖の上に蓆の小屋を建てゝ、夜更くるまで濱の若者等が清酒を食べに來た。母親は三味が彈けた。時々自分で浮れると、客にまじつて小唄を彈いた。わしがふさは十七であつた。不圖した二人が戀は四月の淡い月夜が始めであつた。わしの双親がおふさの

母と妹とをつれて、珍らしく泊りの浦の夜芝居へ行つた留守、おふさが父は早寢して、二人がわしの船で双六をした。互の船は直く並んで繋つてゐたのであつた。この夜二人はたうと戀に落ちた。

それ以來わしが水の上の戀はもどかしかつた。晝の内は、船にゐて商ひするのは年寄と女とだけて、男は荷を負うて、終日三里四里と陸を商賣して廻る。船へ歸つて戀しい夜も、人目がある故矢つ張り言葉が替はされぬ。たまに雨で商ひに出られぬ日など、用事を設けて傳馬船を寄せて船に上り、母親の帳合せの、父が急いで附けた讀めぬ字を、それは十六文だ八文だと口を入れて、僅かの間女の側にゐる事もあつたけれど、小暗い舳の寢床に蒲團着てすば〳〵と煙草吹ふ父親に氣が置けて、戀しさを素振りて知らす事さへ出來ぬ。ふさは生れ附内氣な性分だつたのだが、焙り立てられるやうなわしが戀

の目には、何んの悶えもない狀に横向いて、靜かに縫ひ解きなぞしてゐる物越は、わしに對して、もう心が冷たくなつてゐるやうに見えて、襞の雫を裏悲しくわしは歸るのであつた。浦に依つて船が出て行く時の退汐を見計らつて、わしたちが商ひに出た間に、沖合へ出して諸合つてゐる事がある。そんな夕方歸つて來ると、合圖を聞きつけて傳馬で渡しに來るのは娘子供であつた。八つの船には娘が三人あつた。おふさが渡しに來てくれゝばいゝがと祈つて、稀に嬉しく來合はす時には、わしが代つて櫂を取つて、出來るだけ緩く漕いでゐても、水の上は二丁に足らぬ。女が袂を嚙んで、

「戀しい夜は息が重たうて寢られぬ。」と言ふに、

「女は戀の心が足らぬ。何故わしの船の側へ來ても、こちらも向かずに歸つて行く。」

「小父さんが叱るやうに見えるもの。」

「それは氣の所爲だ。一體お前はつれない。」と恨めば、何んにも言はずに涙ぐんで、船路に搖れる藻草を見つめてゐる女を、

「おふさ、何が悲しうて泣く。」と問いてゐる内に、傳馬は早親船に着く。このやうな心ならぬ明暮故、切ない戀は募りまさつた。

たうと三四十日した或闇の夜中に、わしは窃かに傳馬を出して、四つ隔てたおふさの船へ、底板で水を搔いて附け寄せた。おふさも寢ないて箱行燈の側に悲しさうに坐つてゐた。わしを見と愕いて、灯を吹き消して傳馬へ下りて、

「どこへ伴れて行く。知れたら怖い。」と取り縋る。矢船の習はしは妻合はぬ先に添うた男と女とは一生親から見放されるのだ。わしも何だか怖ろしい氣

がしたが、押へ切れぬ戀は傳馬を岸へ漕ぎて行く。女はわしが裾に縋へてゐた。

それからは半年ばかりの間、このやうにして幾度か闇の夜に紛れて會うた。女を背中に負つて、藻草の中をざぶ〳〵渡つた夜もあつた。船は二人が戀を積んで、浦から浦へと廻つて行く。

其内におふさは病氣で寢てるとかいふ事で、五六日妻を見せなかつた。氣になる餘り、或夕方そつと尋ねて行つたら、おふさは亂れた髪をしてよろよろと出て來て、

「來てはいけぬ。どうやら母さんが知つてゐるらしいから」と追ひ立てた。それ以來おふさは病氣が癒つてからも、わしが夜中に忍んで行けど、慥に知つてゐながら出て來ない。晝間出會つても、これまでのやうに戀しげな目附

をしない。何か知ら出來るだけわしには顔を合せまいとする容子が見えた。もしやわしを嫌ひ出したのではなからうかと心配して、十日許りの間、わしは夜晝悲しく恨んでゐたが、一と日、雨で商ひが休みの午後、濱へ將棋をさしに出かけて行く後から、おふさが傘もさゝずに追ひかけて來て、

「一寸待つておくれ。」といふ。わしは此間から胸が騷いでゐる時故、

「お前にはもう口は聞ぬ。」とつれなく言ふと、

「千さんには何故わしの心が解らんのぢやろ。」と悲しさうにする。

「お前でそわしが心を知らんのだ」と言ひ返せば、おふさはさめ〳〵と泣いて、

「どんな難儀を見ようともわしに添ふ氣があるのなら、相談したいことがある。」と言ひかけた時、船からおふさの母親が、

「ふさや〳〵。」と呼ぶのであつた。わしは急いでさつさと向うへ行つた。

同じ日の夜、

「此宵はまだお灯りか上らぬ、どの船の番だ。」と父が聞く。わしは艙へ出て、

「お灯りはまだか。」と、暗い小雨の中へ聲高く叫んだ。龍神さまへ捧げる焚火である。

「おゝい。」と答へたのはおふさの父の聲であつた。おふさの船は一番端にゐたのであつた。待つてゐると、ぼろ〳〵と焔の燃える松火が、櫓の上に現れた。持つて出たものゝ姿は、闇に煮染んで定かには見えねど、やがて其火をぐる〳〵と廻す筒袖の具合が、おふさの母親らしいと見てゐると、火は三度圓をかいて水へ投げられた。投げられて落ちる時、ちらりと顏が幽かに見える。おふさはたうと、此閃さに似たはかない一と目が、わしには一生の見收

めになつたのであつた。

其晩わしはおふさの事を考へて、夜更くるまで寢られなんだ。矢つぱりわしを忘れてはゐぬものに、畫間なぜあんなに辛く當つたらうと後悔した。おふさが雨にぬれて、涙ながら立つた姿を想ひ浮べれば不憫であつた。考へて見ると、おふさがわしにつれなく見えたのは、容子を嗅いだ母親に叱りつけられたからではあるまいか。そしておふさはそれから毎日母から責められてゐるのではないか知らと氣にかゝる。おふさが父親は平生から何だか怖い。もしも父親がわしたちが仲を知つたら何うなるだらうと續いて考へ廻らすと、何だか黒い影に追ひ詰られるやうな氣がして胸が閉がつて來る。すると艙の方で、たれだか小聲でわしを呼ぶやうな氣がする、よもやおふさは來はすまい。心の迷ひかと考へてゐると、

「おい、おい。」

と再び呼ぶ。慥に年の入つた男の聲だ。そつと出て見たが、暗いから何にも別らぬ。雨はいつしか止んで、苫の雫がぽとり〳〵と落ちる。

「だれかい。」と低く聞くと、水の中を一足近づく音がして、

「わしぢや。」と言つたのはおふさが父親の聲であつた。わしははつと逆せ上る程どぎまぎした。

「惡い事ぢやない。一寸内證でそこまで來ておくれ。」といふ。わしは仕方なしに素直に水へ下りた。おふさが父親がじつと聞き耳を立てゝ、

「あの舟は親御か。」と安心したらしく言つて、わしを導いて、七八間先きに碇を下した小舟へ載せた。わしは何だか薄氣味が惡くてならなかつた。

「わしをどうする積なのか。」と聞くと、おふさが父は私の肩を押へながら、

「氣づかふな。小父に任して置けよ。」と柔しく言つて漕ぎ出した。どうやら三四丁向うの見當に見える、晝間見た大船の灯らしい小さい灯火を目當てに行くやうだ。

「どこへ伴れて行くのか。」と聞いて見ると、

「大船だ。」といふ。わしは合點が行かない。

「何しに行くのだ。あれは明朝佐渡へ出る船ぢやないか。」

「佐渡の船ぢや。お前をおふさと添はせて一緒に他處へ遁してやるのぢや。」

「え。」と、わしは愕いた。

「お前も男だ。これからしつかり一人前になり上れよ。たゞ知らぬ處へ出てはからだが大事だから。」と涙に濡れた聲でしんみりといふ。

「そんならわし等は何處へ行くんだ。」

「それは船頭がよくしてくれる。」

「そしておふさはどこにゐる。」

「ふさかい。」と、問ひ答へする内に、大船が目の前に仄暗く見えて來た。おふさが父はそれぎりずつと默つたまゝ、ことんと大船へ横着けにした。

「お前譯を話すから怖れちやいけんぞ。」と船を向ふの舷へ繫いて置いて、わしが側へ來る。

「何もかもわしが甘くやるんだからお前怖れちやいけんぞ。おふさは腹を氣にして自害した。——千さん、何もそんなに振へるな。見つともない。もう仕方がないもの、此蓆の下に寢せてある。沈めるんだ。海へ沈めるんだ。それて千さんは氣の毒だが船にはゐない方がいゝ。おふさの事は誰れも知らん。あすは二人が遁げたといふ騒ぎになるだけぢや。さあ上つた。」といふ時に、上

からばたりと綱が落ちる。わしは始めて深い息を一息ついて、

「それてはおふさを一目見せておくれ。」と、どれが蓆か、暗闇に探つたら、

「おい、いけない。血が附く。上れ。」と引つ張られて、綱に縋つて船端を上る。

「頼んだぞ親方。」とおふさが父親が下から言つた。

「引受けた。」と頭の上に船頭がゐた。

「待つた。忘れたものがある。棹を下ろしてくれい。」と下でべり〳〵と何か裂く。やがて棹に結び附けられて上つたものを船頭が取つて、わしを中へ伴れて這入つた。

船は翌る日佐渡へ向けて出た。七日目に此水の上へ、

「けふはあの子が一と七日だ。もう女には迷ふなよ。」と言つて船頭が伴れて

下りた。

これはもう四十八年の昔になつた。其の時樟へ結ばれて上つたのは、三十兩の金と、血に染つたわしへの書置と、形見の長い黒髪の一束とであつた。おふさが父親の手拭の裂けたのと一緒に、久しくわしが涙を吸うたものである――言へばたゞそれだけの話だけれど。」と年寄は目を潤ませて話して聞かせた。

自分は此話を、いつまでも自分の事のやうに忘れ得ぬ。年寄はまだ此世に生きてゐるであらうか。

十字架

私は早く母に死別れて、母の顔を知らない。母の形見に遺つてゐたものが、もとは、最う少しは色んな物があつたやうに記憶してゐるけれど、其後祖母も亡くなり、父も世を去つて了つたりした間に、母の遺したそれ等の物も、誰がどうしたのか、いつしか大方は何處へか亡くなつて今私の手に傳はつてゐるものと言つては、たゞ、母が娘の時から持つてゐたといふ、青貝で孔雀を嵌めた、黒塗りの手箱筥と、赤い羅紗の布を、青い絹糸で縢つて拵へた小さい紙入に、細い金の鎖がふは〳〵しく附いたのが、僅かにわが亡き母を考へ忍ぶ種に遺つてゐるばかりである。何んにもない手箱筥の小抽斗の一つに、その赤い色も物古りた紙入が、鎖に卷かれて、冷やかに、たつた一つ小暗く這入つてゐる。私は、その紙入の中に、小さい銀の十字架が、物に包んで入れてあつたのを、子供だから何んであるとも解らずに、その表に、裸の人が

一人目を閉づて、十字架に縛り附けられてゐるのを、小暗い一と間でこつそりと出じて見いしてゐた事を記憶へでゐる。私はそれが何とはなしに、私の見てはならないものだといふ氣がして、暗いやうな心咎めを感じつゝ、こつそりと出し入れしてゐた心持も――それから、その縛られてゐる人が、そんな罪人のやうな刑罰を受けた形をしてゐても、何ぜともなしに、惡い事をした人ではないのだといふ氣がして、その閉ぢた目瞼に引き入れられるやうにじつとそれを見入つてゐた心持をも記憶してゐる。それから物事を解するやうになつて、その十字架にどういふ意味があるかゞ解ると、私は一種の黑い愕きに襲はれずにはゐられなかつた。どうしてそんな異敎の信仰の印が、私の母の形見の中にあるのだらう。いかなる恐ろしい險謀があつたのか、磔の刑に殺された、薄氣味の惡い宗祖の敎だと聞くだけでも、奸邪の疑ひある

異端の宗門に、私の母が何か關係を引いてゐたのだらうか。――

私は早速窃かに祖母にその事を話した。

私のその時の心持はかう言つただけでは表はれない。その時分には、私の生れた町には、基督敎がまだ這入つて來たばかりの時で、或小暗い町筋に、小さな敎會堂がはじめて建てられた。私たちは耶蘇敎といふものをどんなものかとも知らないなりに、何だか氣味の惡い小怖ろしいものに思つてゐた。小さい時には、その敎會堂の、桐の木の植つた、黑塗りの木柵の外をでも、そこにゐる黑い着物を着た西洋人が、入口の硝子戸からこちらを見てやしないかと、薄氣味惡く通り過ぎる位であつた。夜になると。そのだゞ暗い門口に、赤い十字を書いた提灯がどんよりと下げられる。子供たちはこつそりその會堂の側に近づいて、門口の提灯へ泥を投げたり、柵の内へ向けて小石を